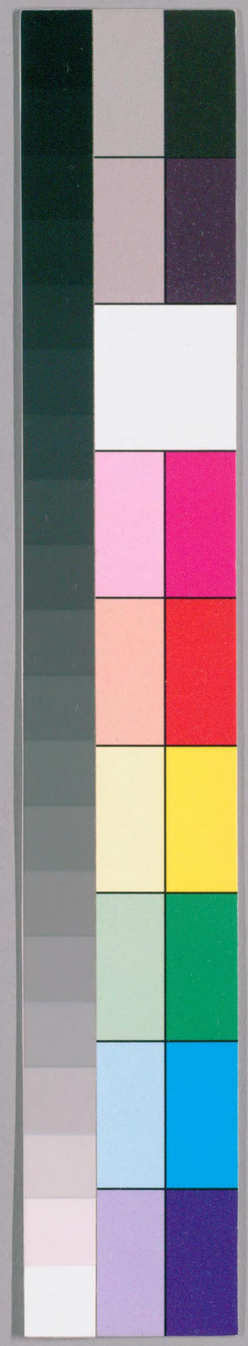
古今集遠鏡

特1
844



国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡』　請求記号 特1-844

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡』　請求記号 特1-844

ガラス使用

古今和歌集巻第十七遠鏡

雜歌上

題しらず　よみ人しらず

ながうへり霧ぞおくれる天の川と渡るふなはちかいのさづくか

○ワシガウヘヽ　コレ雲カラ雲ガフツテクルワ　コレハナンデモ天ノ川ノ渡シ船ノ

カイノ雲トデアロカイ

思ふどち雲居をる夜をかしふしきゝまくをしれ抱ふぞ　ゑろる

○カウ心ノアフタドウシ　ウチヨツテ居ル夜ハ　三　タツテイヌルノガノコリオホ

イモノデサ　ゴザルワイ

うれしれを相ふくつまむうし夜　袂ゆとかふしまてといそほしを

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡』　請求記号　特1-844
ガラス使用

特 1
844

○此ニアウレシイノヲ 何ニツヽマウゾ 此ヤウナ嬉シイ事ガアラウトシツタラ
キルモノヽ袖ヲマソツト ユツクリトタテト云ハウデアツタモノヲ 此キツイウレ
シサガ コシナセバイ袖ヘハ中々ツヽマレルコデハナイ
かぎりなきまちがゝ見ゆるなるは時しもとりぬものなぞ何りなる
○此命ノカギリモナイ 君ニ此目ニカケウト存ジテ折リマスル花ハ カヤウニイツ
ト云時花ノワカチモナシニ咲クモノデサ ゴザリマスワイ 君ノ此命ガ限リモナイ
ユヱニ 花モ時花ノカギリナシニイツデモ咲クデゴザリマス
ある人のいはく此事ハさしのおほいまうちぎゝ此なり
○手紙云こハさしのく下におほきといふ三字。
おちゝるなるべし。
紫の一もとゆゑにむさし野は草ハみながら何ハ是とぞ見ん 後

○武蔵野ハ一本ノ紫ヲアハレニ思フ故ニ 其縁デ同シ ムサシ野中ノ草ガ皆
ノコラズアハレニサ思ハレル
妻ノ妹ヲ 妻ニモツテ居ル人ニ
先のおとゝとゝ此もて侍る人にうへのきぬをおくるそしよ
こそやうとゝする なりひら此朝臣
むらさしの色こきときハ見もたるに野なる草木ぞ分まざりける
○一二 抹者ガ妻ヲ大切ニ存ズレバ 三四 ソノユカリノ人ハ誰デモ皆サ 妻同ジ
五 ワケヘダテナシニ大切ニ存ズルワイ
大納言ぬぢいら此ふにつき乃朝臣寧おとり申
納言になりまきる時にそめぬうへのきぬのあやをおく
家とてよ見る 近院ノ右のおほいまうちぎゝ

○素読六 ○二

国立国会図書館 タイトル『古今和歌集遠鏡』 請求記号 特1-844
ガラス使用

いろ相しと人やみるらむ昔よりふりきんにそ見てしものを

○コレハ白ノ綾ナレバ　ナニニモ色ガナウテ　奥ノナイヤウニ　思ハツシヤルデカナゴザラウ

吾ハトウカラ出ル様ヘキツウ涼イ心ザシデ濃ウ染テオイタ綾デゴザルモノヲ

いそ此かゝの相ゝまれがみやづかへもまでいそのかゝしいふそ絶ふこもり結ひ絶ふそ絶ふからふりしるハまりひまばよろこびいひつかはしてよそてはかれしきる

ぬるの以まみち

日此ひかりやぶし和かゝ此ぞ此そ此かゝ此ぬりはし里に花も出きけるも

○此上ノ此メグミハ　ドコマデモ　ユキワタツテ　テウド日ノ光ノドノヤウナアレタ取デモ　ワケヘダテナシニ此照シナサル、毎リナレバ　久シウ引籠ツテゴザツテ此沙法モナカツタ出ル様モ

此度ケツカウニ作付ラレテ　マコトニ花ガ咲マシタワイ　一ツ目出度ゴザル

二條のまさ紀乃東京のみやまむ所とゆきるとき

伊母儀様

ましおかゝ雲にまきて結ひける日よめ爲

なりひら此紀

太原やをし不此山もりふこそハ神代のるすもおもひ出ら見

○カヤウニ此子孫ノ菅原氏ノ此息所ノ東宮ノ伊母儀トシテ伊系詣ノアルナレバ　此大原野ノ此神モ　カノ神代ニ天照大神ノ此神ヘ勅定ノアラセラレタ此ヲモ　今日コソ晴出世テ此満足ニ晴スデゴザラウ　此家此説

五節此まひ姫をみてよめる　よしみゆのむ孫さぐ

天つ風雲の此かよひぢふきとぢよをとめ此をがて志ばしとゞめむ

○アノ天女ノ舞ノスガタガ キツウ面白イコデ 名残オホイニ 雲ヲフク風ヨ
アノ天女ガ 雲ノ中ヲ通リテ天ヘイヌル路ヲ吹トヂテ イナレヌヤウニシテクレイ
ソレタラ モウ シバラク留メテオイテ マソツトアノ舞ヲ見ヤウニ

餘材ふ風雲共ふうたゝる拙なきバかくの従なくどくし。

五節のあしたにかむざしの玉のおちたりけるを見てたが
ならむととぶらひてよめる　河原左のおほいまうちぎみ

ぬしやたれとへどしら玉いはなくにさらばなべてやあはれと思はむ

○此玉ノ主ハタレヂヤトヽヘド 皆ワシヤシラス〳〵トイウテ タレモワレガノヂヤトイフモ
ノモナシ 誰ガノヂヤトイフモノモナイニ ソンナラユフベノ舞姫ヲバ 誰トイフコトナシニ惣ク
ヲアハレイトシヤト思ウテヤロカイ　上句又 主ハ誰ヂヤト玉ニ問ヘドイハヌニ

寛平御時うへのさぶらひに侍りけるをのこども瓶を
もたせてきさいの宮の御方に大御酒のおろしときこえに
たてまつりたりけるを蔵人どもわらひて瓶
を御前にもていでゝともかくもいはずなりにければつかひ
のかへりきてさなむありつるといひければ蔵人の中に
おくりける　としゆきの朝臣

玉だれのこがめやいづらこよろぎの磯の浪わけおきに出にけり

○サキノ小亀ハドコヘイタゾ　催馬楽ニ玉ダレノ小瓶ヲ中ニスヱテ 肴求メニコヨ
ロギノ磯ニトアルガ　コチノ小亀モコヨロギノ磯ノ浪ヲワケテ沖ヘ出タワイ　沖ヘサ
玉だれのこがめ。諸説あれどおぼつかなし。○千秋云。第四句は名ハなむを写誤まる
にやと田中道麿がいへるさもあるべし。

女ガ結ンテヨコヒ見レバ　よめる　きん峯いわたし

かくもちてそみやまがくれにけらし木ノ葉もしたに花ちりにけれバなりけむ

○女中タチ　メツタニワレヲ笑ハレヤルガ　山遠リ形コソ深山ノオクノ朽木ノヤウナレ

ワレモ花ニセウナラ心ハ花ニモナラウワサ

かくしがたき人の身にまち侘るときにしるし此きぬ

をきをしりきるはあしにふかへてとてよこきる

きれ衣と此身

嫌のたれよるれ衣ひさうきをきどうつりがしくもにほひぬるかな

○ユラベオカリヤシタ此衣ハ時花ナレバウスウハゴザルケレド　ウツリガヽサテモ一ア濃ウニホヒヽ

スルヿカナ　オタレナミノホド感心致シタ　餘材ヨロシ。打笑ヨロシ。

新しらば　よみ人しらず

おそくいづる月にもまさりけるしるの山のかけともをしむべらなり

○サテモ〳〵一ア（も）オソウ出ル月デゴザル（わる）ヿカナ　コレハナンデモ　コチラデ此ヤウニ待ットホリニ　アノ

東ナ山ノアチラデモ　山ヘ入ルノヲ人ガ皆惜ムト見エマス　ソレデコチラヘ上テコヌデゴザラウ

見がたき物なれどさめうきつきしらるやをぐらの山にすめる月をみて

○今夜此ヲバステ山デ月ヲ見レバ　サテ〳〵サヤカナ月デ　見テ居レバドコトモナ

ウ物ガナシウナッテキテ　ワレハドウモ心ガハラサレヌ　此歌ハ見テ居レバ山ノ

名にかくるてふ所なれば又和らぎにしかしば和ハいづこにても同じ事にて、あ

のことハしらず月見ればちぢにものかなしきはなどいつるとぐひなるを。

しるかく　をぐらにて山にすめるのこと。

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡』　請求記号 特1-844　ガラス使用

なるも知られ給ひ

大かたは月ぞもみんでじこもぞこの法をもしば人のおいとなるもの

○タイガイナラナラモウ月モアマリ 賞翫スマイゾ コノアル月ガサ アノダンくトツモ

レバ人ノ年ノヨル年月ノ月ヂヤ　きべてこもぞこのといふ詞を俗語に

コレガアノ云くヂヤといふこと、ちもやこのハ、コレガアノ云くカといふことなり。

このそかのの事し、此かにも雅言にハ、かのといふべきことは、ちのといへる

俗多し、おすに神句、大かたのとつる本をとりて、そハ行しきよしつるハいかゞ。

月おもしろしとて凡河内躬恒がまうできたりける

りしらめ流

紀ノ法しゆき

かゝり見までうちくもつるかな月新乃いたらぬ里もつらじと思へば

○月ハカウレテ見テ居ツヽモマアウトくシウ思ハルヽフカ　コヽバカリデハナレニ　ドコヘモ

カシコヘモ新ノユカヌ里モアルマイトなズレバサ　考槇モソンナモノカシラヌ

○手秋云、たゞめニ句、見もどかつうちくもあるなれ事也、かゝりハ、

見るとうちきと一つにまじまるにおきたる詞なり

池ノ月ハ見しけるよ考る

ぬらしつまれものと思ひしとみな底に山のそ形しでいづる月うらまし

○月ハ二ツハナイ物デ山ノハデナケレバ出ヌモノヂヤト思ウタニ　アレ山ノハデナイアノ池

ノ水ノ底ヘモ出タ　コレデハ二ツモアル物トアエル

新しらぜ

よみ人しらず

天の川雲のみを出てしたやけ死バ知りりとゞ見ざ月ぞながらく

○天川ハ雲ノ水スヂデ漱ガアイニヨツテ　月ノ光ガサシバラクモ海ラズニアウ流レテユク

あかずして月のかくるゝ山もとはあなたおもてぞこひしかりける

○マダミタラヌニ月ノカクルヽソノ山ノフモトデミテ居レバ 月ノ入ルアノ山ノアチラウラヘ行テサ 又ミタイワイ

これたかのみこのかりしけるともにまかりてやどりにかへりてよひとよさけをのみ物語をしけるに十一日の月もかくれなむとしけるをりにみこゑひてうち(オクヘ)へいりなむとしければよみ侍りける　なりひらの朝臣

あかなくにまだきも月のかくるゝか山のはにげていれずもあらなむ

○アノ月ハマダミタラヌニ キツウ早ウマアカクルヽコトカナ アノ月ノ隠レル山ガ ワキヘニゲテインデ 月ヲ入レテクレネバヨイニ カウ云ノハ月ノ事バカリヂヤ ナイゾヨ

田村のみかどの御時に斎院に侍りける(デアツタ)あきらけいこのみこを母あやまちありといひて斎院をかへられむとしけるをそのことやみにければよめる　あま敬信

おほぞらをてりゆく月しきよければ雲かくせどもひかりけなくに

○空ヲ照テイク月ガ清イニヨツテ ナンボ雲ガカクレテモドウシテモ 光ハキエハセヌワサテ

題しらず　よみ人しらず

いそのかみふるからをのゝもとがしはもとの心はわすられなくに

○上 モトカラノ心ハ ナンボウデモ ワスレラレヌモノヂヤ

いにしへの野中のし水ぬるけれどもとの心をしる人ぞくむ

○ムカシキツイ ケツカウナ清水ヂヤト云テ 名ノ高(カ)カツタ野中ノ清水ハ 今デハモウ

ナニヌルウナツテアルケレモ ソレデモ昔ノコヲ知テ居ル人ハサ 今デモ汲(クン)デノミニス
イフ〳〵ヘのをぐらいやし〳〵ゐもよきもゐるとハ有〳〵ねるり

○一二 ヨイ所ハカリデハナイ ヲラガヤウナ賤(シヅ)イ者デモ一度(ド)ハ男ザカリハアツメ物ヂヤ
今ヲそのまゝ有くもむ〳〵ハをとゝふさゆく〳〵時もるそ〳〵りのこと

○今コンヤウニ年モヨツテビンボフヲスレ オレモ昔ハイツカドノ男デ 繁昌
ニクラレクサ弟モアツテキタモノヲ アンクチヲシイコヂヤ
芸事にふりゆる袖をはのおれなぐ〳〵のそ〳〵る秋のくる

○ナンデモフルウナツテオトロヘタヲノタトヘニハ津ノ国ノ長柄ノ橋ト云ヂヤガ
世中ニフルウナツテシマウタ物ハ其名柄ノ橋トオレトヂヤワイ
きれ柴をゆりつむ雪ゆへちゆくるがちりいを

○篠ノ葉ヘ雪ガツモツテ 来ガオモサニ本ノ方ガカタムイテユクヤウニ オレモサヤウニダ
ン〳〵年ガヨツテ衰ヘテユクガ 昔男ザカリノ時ハ一アイツコデアツタゾイ ハア〳〵
大あら〳〵おれもるの下草おいゆるとバ人もなし

○大荒木ノ森ノ草モ キツウタケテカラハ 馬モ喰(クヒ)タガラズ 苅ル人モナイガ
人モソシナモノヂヤ 年ガヨツテカラハ 誰レデモキラウテヨリツカヌワイ
みをばかくつゐなの下草おいゆるとバ
かぞふるとバうめ〳〵ぬ〳〵ものをそ〳〵といひてとしいく〳〵おいそ(ふ)ふる雪

○(二)ヒラクモト(三)ヒラズニ早ウヨテユク年ヲ アヽヨウタメツタメ〳〵トヲテハヨギ ヲテハヨギシテ
ソノ年ノ数ヲカズヘテヲンレバ 今年ハモウオレモキツウヨイ年ニサナツタワイ
物なれハ心の為に上うにをそんなべく〳〵飯村ふ止の三句つゞきそうよこ

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡』　請求記号　特1-844
ガラス使用

てんぱべしといつるは誤し。とまらぬ物とハ早き物といふことにて、年のことし
おしてるや難波のみ川にやくしるのからくとこれを老にかゝる事
○上 アヽナンギナオレハマアキツウ年ガヨツタヿカナ
又はおなとものみ川乃ちゐべり
おいらくのこゝろしるをバ門さしてなしとこゝろへて何ぞしほしを
○此老ト云モノガ 来ウト云ヿヲ トウカラ 知タナラ 門ヲサシテオイテ
数守ヂヤト云テ 逢ズニ居ヤウデアツタモノヲ
此三つのうたハ昔有をみたりのおきの乃よめるとの事
さうさ故に年を逢ゆかなむとりも何へどるよりひやそとにかつると
○月日ガドウゾマアサカサマニアトヘユケバヨイニ ソシタラ 何ニノマモナウツイタツテユク

人間ノ年モ ソノ月日トイツシヨニ跡ヘモドツテ 又若ウナルデアラウカト思ヘバサ
とうもとむる物にしてのくるが年月の物あるうとるしたる式
○月日ノタツテユクノハ トリトメラルヽ物デナケレバ ドウモセウヿガナサニ
アヽハレ早ウタツタヿカナ アヽウイコトヤト云テタテヽユクヂヤ
とゞめてのへどうべくもとしといはれるとしたりとつきのくるよりひの
○一トメウト思フテモドウモトメラレイデ 四此ヤウニマア ヲシムノニシラヌカホデ心ヅヨ
ウズカヽト五年ハ過テユクヿカヤ 二三トシト云ハレルノハ モツトモナヿヂヤワイ
トシト云ハ早イト云ヿナレバサ 寺ハ句ハおきうへて。一日云二三
と語ましてんぱべしとあるよりし。
かゞえ山いざ立とりてみてゆかむ逢へぬる事をおいやしぬると

○鏡山ト云山ナラ　人ノ親ガヨウウツルデアラウホドニ　四久シウナツタ此身ハ
五年ガヨツタカト　ニドレヤタチヨツテアルテユカウゾ
此家にある人の心をくしたるとも此ら待ぬしがし
那りしらの親たれたくのみこも思ふまゝ待る時ふなりひ
らあづくへまとて時々もえまかりとふらいぞ待るまゝバ
ジブン
うるふたれみこの也まよるとみ（キフナ用）のるまとて女をりてもう
じきくりつきてんまゝバしらづく那くてまゝるうく
おいぬまゝバさらぬまゝもつまとくいへだいよくしまくわし記君に
○世中ノナラヒデ　ゼヒトモノガレヌ別レモアルト云フナレバ　一年ヨツテハ　身ニ明日モシ
レ子バ　イヨノ君ニドウゾ逢タイフカナ　上句二三一と次第してんはべし。

かゝるし　那りしらの朝たれ
世中にさらぬ家もなくもがれちらよもと歎く人の子のとめ
○親ノ壽命ヲアヽドウゾ千年モト親フ子ノタメニ　世中ニハドウゾ遁レヌ
別レト云フノナイヤウニシタイフカナ　○子歌云人の子と云ハ親ふむかへ子といふなり。人のおやといふもしらぐ親し。これも古語の例し。
寛平法時きさんの家の家合の家　つるとつらのもしやな
ふ雪の八重ぬりしきるかつる山かつるくもおれふまるか那
○オレガ頭ハマア　雪ノイクヘモノツモツタヤウニマツ白ニナツテ　カヘスヾモ
キツイ年ノヨリヤウカナ
おなじ清時うへのさふらひとてをのこどもにおわさ
き給ひてくおわみあそび有きる法いでふつかうまゐ

もしゆきの朝臣

おいぬとて物どう家身ぞせ先ぎ(渇)乃むおいぞ(清)ぱ乃ふにつゐまし物の

○家身ヲ年ガヨツタト云テ　ナゼニフソクニ思ウタヿゾ　今日思フテ見レバ　年ノヨ

ツタハウレシイヿヂヤ　四　カウ年ノヨルマデ生(イキ)テ居ズバ　今日ノヤウナ　アリガタイ事

ニアハウモノカイ　年ガヨツテ生(イキ)テ井レバコソ　せ先ぎの説。既注よろし。

題しらず　よみ人しらず

ちはやぶる(渇)宇治のたしも物もぞしぞつゐまとは思ふ年のへぬもしバ

○一　宇治ノ橋守ヨ　ホカノ人ヨリハ　手方ヲサ　オレハ　フビンニ思フ　オレト同

シヤウニ年ヘタ老人ヂヤト思ヘバサ

家見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松いくよへぬらむ

○此住ノ江ノ岸ナ松ドモハ　オレガ見キタツテモ　モウ久シウナルガ　ソレヨリマヘ

始メカラハ　イカホド年ヲ経タヿヤラ　サダメテキツウ久シイヿデアラウ

住吉のきし乃ひ先松人ならばいくよか経しらしいまし物を

○住吉ノ岸ノ姫松ガ人間ナラ　イカホド年ヲ経タゾト問テ見ヤウニ

梓弓いそべの小松しるが苦りしか家代のほてしらぬまもむ

○一　此礒べノ松ハ最初ニタ子ヲマク時ニ定メテ　四　コレカラ後万年モオヒシゲ

レト思ウテ蒔テオイタデアラウガ　ソレハ昔イツノ代ニ誰ガマイタヿヤラ

此小松ハ、しらぐ松し、ちひさ花をいふまいらぬ。そいらぐ馬を駒といひ、猪を

ゐのこ、廉を麻子(カコ)といつる例し。これらの例、こなた書ふ見也。

此家ハある人のいとく梯本ノ人まゐがし

かく〳〵つゝ学をやつらむる砂乃尾の上ふ〳〵そる松のなく〳〵

○オレハ仆ヤウニ手バッカリヨッテ今ノデ何一ツコレゾトユテシダレタルモナイガモウ仆ヲリデ一生ハテルデアラウカ

○イ山ノ上ニアル松コソ仏ノスルコモナレニ久シウアル物ナレ オレハソノ松デモナイニサ

（多秋云、ヒクきくらべきうゝと歌をそる。）

老ぬるもつるくをむる砂の松もあらしの風ぞおきうせ

○オレハ仆ヤウニキツウ手ガヨッテ今デハモウ同ジコロアヒノ友モ子カラナイガ誰ヲマア相手ニセウゾ 山ノ上ノ松ガ年久シイ物ナレド ソレモ昔カラノ友デナケレバ相手ニハナラヌ モウ松ヨリ外ニオレガクラ井手タ物ハトントナイ 飽材ろろ〳〵

よみ人しらず

海のおきつ白ふ〳〵（波）の消ぬものかゝる方もあり

○オレハ海ノ沖ノホウヘ浮ク沫ヤウナ物デ消ズニハアリナガラドコヘモヨリツク取モナイ

あくつくもうぎ〳〵にさせるふ〳〵の浪もてゆへるわらじ〳〵毎山

○浪ノ白ウタツノハトツト苑ノヤウニアルガソレデアノ浪ハ海ノ永様ノ仕ツムリノカザレデヤトイノソレアノ淡路嶋ヲユレカヘレバアレヤ其ノマヽ白ナ浪デクルリ〳〵トリマハシテテウド常ヲシタヤウ（ゆへる）ナ事サテモ〳〵事ナケレキヂヤ

ヰ笑ろ。かざ〳〵ふさせるとハ浪のるふくをもろ〳〵ちくきむづ（閑）鴛〳〵もろくもあふよもせらる浪の志ぢくをもえまく

○仆玉津嶋ヲ見バ浪ノウチヨセルヤウスナド サテ〳〵面白イケレキカナ（うと）ドウゾ爰ヘモ来テ見タイトコロヂヤ

（多秋云、玉津嶋ハ三代実録ニ玉出嶋トカヽウ。つゐ抱浪ヨハ玉出ル嶋ナレバ浪ヲモ玉ノ出ル嶋ヲモ詠ルベシ。）

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡』　請求記号 特1-844　　ガラス使用

なにはがたしきやみちくらしにて夕夜しかえのく鳴にしらづ鳴ことを

○ハアシホガミチテクルサウナ（らし） 雛波ノ 三 タミノ嶋ニ鶴ガトビサワイデ鳴ク

貫えがいづれ時にかり侍る時にやうとしたりこえまうでし

きてよみてつかしきる 藤原しかぐぬさ

君を思ひおきつの濱にしかしくしげの君をしくしげぞにてのりとしらふきく

○拂者ハ岩根ヲ思フテ忘レズニ此（二）色マデ 三 君子テ糸ツタレバコソ 五 此岩事ナ

ト云フナリトモ吹（キイ）タレ 岩根ノ方カラトテハ一向此君子モトサレヌ サテノ〳〵キ

ツイオミカギリデゴザル

加へし 法ら少紀

おきつ浪しかりし時たる乃ち岩根の名にてそ君にまち浪をつる

○一 アノ富師ノ濱ノ松ノソノ松ト云名ノ通リニサ 拂者ハトウカラ（ちくり）岩根ヲ此待ヤシタワイノ

なにはたにまかりきる時よ見る

雛波がこおふる玉藻をかりそめ時あるとぞ家ハ明りぬべらなる

○雛波ガタノ風景 サテノ〳〵面白サニ シバラク此色ニ逗留シテ 尚分（うりそめ）玉藻

ヲ刈ル海士ニサ オレハナラウヤウニ思ハレル

何ひ志まりける人の住吉にしはしでけるによみてく

法ゲ〳〵しまる みふのしかぐ三孫

住吉と何方ハつぐとも船がぬきな人とも猶そおふとしいふなり

○住吉ヘゴザツテモシソコノ海士ハ住（スミ）ヨイ取デゴザルト云テキカス氏 必ス長居バシサツシヤルナ

ヤ 住吉ハ生取ノ人ヲ忘レルト云ワスレ草ガハエテアルト云フ ヂヤホドニ

○堂読六

○十三

なかはへまかりけるうきくるまえ此ノ嶋にて海にかけてよ

見海　　清ら申紀

海りとるとこゝろのしたる波ハふゆきバ名ハかくれぬ物ぞ有きる

○雨ガフルニヨツテ蓑（ミノ）ト云名ヲ頼モシウ思フテ此雖波ノ田蓑ノ嶋ヲ今日トホツテユケバ

取ノ名ハ蓑ナレド　名ニハ身（カラダ）ガ隠レヌモノデ　海フリノ局ニハアハヌ物デゴザルワイ

清皇西川ニおはし（へ法出アソバサレタ日）ましたりける日　清皇にしたりと

いふことを聞りてよませ（オヨマセアソバサレタ）給ひける

あしたづのこゑする河べを。吹風にしたきてうつらぬ浪かとぞ見海

○川ノハタニ白イ鶴ノ立テ井ルノヲ　ワシハ風ガフイテヨセタ浪ノカヘラズニアルノカトサ見タ

○手紙云さべて河しらずとは白き鶴をいつり蓋此苑の白きによれる名也。

○蓋紫にも白鶴（アシタヅ）と云り船をおのれくれしき考へわり。

中務此みこ此家の御うし船をつくりておろしはじめて

あそびける日　清皇御らんじにおはしましたるをきり

多さりつかうかつりおはしまさむと志けるをとよみ

てしまて御門とける　伊勢

あれうへにうかつる船乃君船らがさしぞ見りといはなし物を

○君ガ　水ノ上ニウイテアル船デアラセラレウナラ　コヽガ船ノ泊リマス所デサ　ゴザ

リマストヤ上（シケ）テ　コヨヒハ清海メヤシマセウモノヲ　○手紙云此ノ上ノ句此ノ譯にていとよく聞しり。

かうしたらいふ所まてよある　　志きん清河

みやこまでしぐきかよつるかうこゝハ浪の続きぞて風ぞしきをる

○京ニデ笑エテ名ノトホツテアル事琴ノト云事ヲ来テアレバ　風ガフケバ浪ガ立テ音
ガスル　スレヤ此カラ琴ハ　浪ノ糸ヲスゲテ風ガサ強ノヂヤワイ
布引のたれにてとめる　左京行平朝臣
こきちらしこきれ玉ひろひおきて　其れられ時乃後まぞかなる
○此歌ヲアレバ　水ノトニデ走ルノガ　テウド玉ヲ緒カラコキチラスヤウナガ　此玉ヲ
ヒロウテオイテ借リマス　ソレテワレガ身ノウヘノカヤウニウイ　此節ノ後ニセウトなズル
布　ぶきれ歌のもせにて　人々何つまりて　あよみを
家時ふよ　ゆる　　ぬりひらの朝臣
ぬきみだる人にそ何ならし　玉ぬきまぬくもちるら　袖のをだれに
○此五アサバイ袖ヘツマレモセヌホド　玉ガアヒダナシニシゲウマアチツテクルヿカナ

コトハナンデモ　ツナイデアル玉ヲ　誰レゾ緒ヲトイテバラくニシテ　此歌ノ上ノ方カ
ラチラス人ガサアルサウナ
よしの歌をアんてよめる　兼均法師
くるぶしめ所にて　ちらせる布　ぬきやよ　ぬへてアれ　ぬる人もなき
○アノヒツハツテサラシテアル布ハ　誰ガキルモノニスル布ヂヤカ　ツマトマヘカタカラ
アルガイツアテモソノマヽデアツテ　トリイレル人モナイ
歌をさぬきち布にしてよみしるし　次なる三そうも同じ
題しらず　神名法師
清歌ぬきぐのさつ糸くりしめて　山ぶごろもおとてきゆし　此
○此清歌川ノ瀬々ニタツ浪ハトニト白イ糸ヂヤ　此糸ヲクツテタニトタメテ　山ヲア

ルノ時ノ衣ヲ織テ着(キ)ヤウニ 清潔ノ清イ糸ナレヤ 出家ノ山アルキノ衣ニヨカロワサテ

鶴門ヨリ御うでゝ潔のもとにてよめる

いせ

しおちぬをぬきぬきしく人も船きおもをなふ心ぢめ時布さらはらむ

○タチモヌイモセヌ衣ヲ着(キ)タト云 昔ノ仙人モ今ハ居モセヌノニ ナニノタメニ

山姫ノアノヤウニ布ヲサラシナサルヿヤラ

朱雀院のみかぶと布門乃潔はらもせむとてふむ月

のなぬか時日おもしほしてあるゆゑ時にさふ人ゝにうと

よみせ給ひけるによめる

しおちぬ時なかもと

ぬしなくてはらをる布にはらはるゝにふ給ふやはふきうさあし

○ヌシモナウテサラシテアルアノ布ヲ オレガ物デハナケレド ヌシガナケレバ オレガ

心デ タナバタニ借(シ)テ進ゼウカイ 今日ハ七(シツセキ)タチヤニ

ゑえ時山なるおとをおしまきにてとらせる

しおじみ

おちらしぬつ潔のこれかみ年つもりと老ふまきしなまきたぢなし

○タギツテ落ルアノ潔ノミナカミガ 久(三)シウナツテ 年ガヨツタサウナワイナ 皆白髪バツ

カリデ 黒イ筋ハ一スヂモナイ カウ云ノハミナカミヲ髪ニシテヂヤゾエサウゆヲエルカノ

おすじ潔をよめる

みつ孫

風ぬけどとしつもはらぬ雲ハよはへてし落るあふぞなきはる

○雲ハ風ガフケバ隠ヽヨソヘウツテユクモノヂヤガ 風ガフイテモ同ジ取ヲサラズニ イツデ

モ同シヤウニアルアノ白イ雲ト見エルノハ　四　昔カラ落ル瀬ノ名デサゴザルワイ

田村の御時にし女ぞうのさぶらひ出て法屋風の恋法
らもじきるに瀬おちにわかるとて後おもしろしこれ
を見てうたよみとさぶらぬ人にしおほせらるるを
きばよめる　三條の町

思ひきくんの乃うちのゆきのもやおつとハ見れど音のしぬ

○人ノ思ヒヲコラエテ隠シテ居リマスル心ノ内ハ瀬ノヤウニワキカヘリマスル物デゴザリマスルガ　此
繪ノ瀬ハサヤウノ心ノ内ノ瀬ヂヤカ殺シマシテ落ルトハ見エマスレド　子カラ音ガ笑エマセヌ
屋風の絵なる花をよめる　つらゆき

咲そ見し時より後をうちなへて常ハ春ものもや色のつゆ物

○咲ソメタ時カラシテハ　ウチツヾイテ常中ハイツヽモ春ヂヤカシテ　此花ハ
色ガジヤウヂウオンナシコヂヤ
屋風の恋にしよそ合をてかきまる
坂上これのり

かつとてほとゝ山田乃い稲のこれにもて物きてそ後も秋のうきもバ

○オレハ秋ガツライニヨツテ　一二　此ヤウニヒタヽくト涙ヲ流シテ泣テサ　クラスワイ
かりて小雁をこ見て下ノ句の縁とをる。

古今和歌集巻第十八遠鏡

雜歌下

題しらず　　よみ人しらず

世中ハなにかつゆかるゝ何をか川きのふ乃淵ぞけふは淵になる

○世中デハ何ガイツモカハラヌ物ヂヤゾ　アノ飛鳥川ヲアルレバ　昨日マデ淵デアツタ取

ガサ　今日ハモウ浅イ淵ニナル　川サヘサウヂヤ　スレヤナンデモカハラヌ物ト云ハナイ

いくよしも何らじ家身ぞなぞもかく何方ぞかるとに思ひみだるゝ

○モウ生テ居ルアヒダモ何ホドモアルマイ此身ヲ海士ノ刈ル藻ノ乱レタヤ

ウニ　ナゼニオレハマア此ヤウニ　ドウカウトイロ〳〵ニ苦労ニ思ウヿゾ　モウワヅ

カノ為ナレヤ　ドウデモカウデモヨイヿヂヤニ

為ぞかる雀の鈴ぞかれどのこおもひつきせぬよの中ぞうき

○一二　心ノハレル時モナシニ常住思ヒゴトノツキルト云ヿモナイ　此世中ノツラサワイノ

小雅とかむらの歌

さいうまとそてそむか猶なくに事しあるばまづ歎かるぬあるうよの中

○サウヂヤト云テ　ノガレラレモセヌ世中ヂヤニ　三ナンゾト云ト　マヅアヽウイ世中

ヤト云テナゲカルヽ

かひのかゝに結ぶるとに京へまかりのぶ里をする人り

法かりしきる　　をのゝ法ぞれ

京へまかりのぶ里とつゞ所ふ。折笑ふ。強しといひて。まうのぶ

里と改めらるゝハ。むとまりハさることを。事ゝに例ふとがつり。

○遠鏡六　　○十八

そハ古ヘ不相づきて此集ハ此ころの詞づかひを。これまへらまざるなり。
氣傷ノ類の詞ハ此ハ。京ハもてまかりてとゆるをや。今ハ京となり
ての詞ハ。すべて京ハ其ぬるかハまきかなとこれ其ハ早上下
ハかゝりしぬおなるへゆくぬまかるといひ。こなるへ来るぬまうで
といふ一種あり。例を考へ見るして知べし。此ハ多き詞也。

みやこ人いかにとゝいぐ山ゐるかたゝ横ぬ雲ゐにしらぶとこゝへよ

○モシ京ノ人ガワシガコヲドウヂヤト尋子タナラ　山ガ高サニジヤウヂウ雲
ノハレヌヤウニ心モハレヌ　幸イ国ニ雖義ニ思フテ居ルト云テトサレ

○一二　ぬもやのやまゐでがみかれ此ぞうハなりてゆがさん
そハえいでゝゝしやといひやまゐるかつりてハよ然る

打笑わがこの説を得し

小野小町

ひぬまバ身ぬうれ草乃根を絶てさそふ所ゆらぶいなむとぞ思ふ

○ワタシハモウウイツライ身デ　雖義ヲ致シテヲリマスレバ　浮草ノ根ガナウ
テドチヘデモ水ノユク方ヘサソハレテユクヤウニ　誰デモサソウテクレル人ガアラウ
ナラ　ドツチヘナリ氏系ラウトサ存ジマスル

題しらず

ゆきれてふきとゝそうそしよの中ぬ思ひをれまぬ者ぞしなりけれ

○人ノアハレオイトシヤト云テクレル詞ガサ　ウタテヤ　世中ヲ工思ヒハナレヌホダ
シヂヤワイ　タマ〳〵ニモサウ云テクレル人ガアルト　又ドウヤラステルモ　ヨリオ

ホウナツテサ　　ホウナツテ　　よこ人しらぞ

わかれてふ云れ柴ごとにおく露も芳しかるなりけるを

○昔ヲ思シウ思ウテ　アヽハレアヽハレト云タビコトニ　濃ガコボレル　スレバソノアヽハレアヽハレト云言ノ柴ヘ　菓ノ柴ヘオクヤウニオク露ハ　濃チヤワイ

よれなりけるこれもつらきもつぎ如くにまづとするものハ濃なりけるを

○世中ノウイフモツライフモ　云テキカセモセヌノニ　一ツ一番ニ知ルモノハ濃チヤワイ

其の中ハ愛かうつくかうつくとも愛としたらば有てなるまじ

○菱デアラウカ　正真ノ事デアラウカ　ソウタイ　世中ノ事ハミナ　アツテナケレバ　正真ノ事ヂヤ　菱ヂヤ　ドウモシレヌ

よの中に此づらく家方れ有て如しこのはとやいたむあなうとや　いた世を

○世中ニドレドコニ我身ガアルゾ　人ト云モノハ明日死ナウモシレヌガ　明日ニモ死子バヂキニ埋ミカ焼カシテシマヘバ　此身ハアツテモナイ物ヂヤ　ソレヲ思フテアレバ　アハレトイハウカ　アヽウイトイハウカ　サテモ〳〵人ノ身ハハカナイ物ヂヤ

餘材の匂を　おもしろきおもやいたむと注しるハしるがつり

山里ハものしさびしきことこそこのまれ　其れうれよりハさみよかりけるを

○山中ハ物ノサビシイフコソワルケレ　ソレデモ世中ノウイノヨリハマシデ　住ヨウゴザルワイ

ことしるかれみて

ふかきれしるえだしられぬ　ぶくぶくにたえバたちぬる　其ふてそ見れ

○雲ノフダンタナビクヤウナ高山ノ峯デサヘ　スメバカウシテスンデトホル世中デサ　ゴザルワイ

○芝蘭六　　○二十

ぬるの以まみち

志ぞふかむきくてもいとへとの中ハ浪乃さきだに風ぞしく春雨

○コレ世間ノ流 一 知テ居ラルヽデモアラウガ モシ知ラシヤラズバ 今ワシガ云テキカス

ヲ 此メテナリ圧 此世ヲバ早ウステサツシヤレ テウド風ガ吹テ浪ノサワガシウシ

キリニウチヨセテクル荒イ海ベノヤウナ世中デ アヽドウモ落付カヌアンドノナ

ラヌヤウス(名ヨ)ヂヤゾヤ ○手秋云下句風吹て浪ぞさきぎ志くめるといふことなるを さハいひがたきなに風と浪とを分てハいつるなり。

そせい

いづくにの世をばいとハ世とんこそ世にも山にもまぐふ屋なれ

○世ヲステヽドコニサ 住ウゾ タトヒ野ニスンダリ圧 山ニスンダリ圧 ヤツハリ心ハサ

ヽヨウデアラウト思ハルヽワイ

よみ人しらず

世ノ中ハむかしよりやハうかりけむ 我身むとしのこめに相まるの

○ヨノ中ハ昔カラ此通リニウイ世ノ中デアツタカ 但シ又オレガ身ヒトリノタメ

ニ此ヤウニウイ世ノ中ニナツタノカ ○手秋云ニの句やたハ ぐやのことなり。

よのおもひいとふ山べの草木とやつなうれ 若乃亀に出にけむ

○せケンノ人ガ 四 アナウヤト云テ 一 世ノ中ヲイ 二 トウテ来(キ)テ住ム山ノ草木(サウモク)ヂヤトテヤラ 五 キウん

ウイト云名ノ卯ノ花ガ 五 此山ヘ咲(イ)タ

みよし野山乃ちなるにやどもがおよのうれ時のかつまがにを見

○吉野山ハズイブン深イ山ヂヤガ オレガノゾミニハ マダソノ吉野山ノアチラニ

家ガホシイモノヂヤ 世ノ中ノウイ時ノヒツコミドコロニセウニ

○是境六

○元一

よふぬるまばうさてうちまき猶みたしの〻岩のかげ(清)をふきなしてむ

○世間ニカウシテ居レバ　次第ニウイツライ　ヲバカリマシテクルニ　一日モ早ウ吉

世ノ雑(ナンジヨ)取ナ山ノオクヘヒツコモラウゾ　ヤレ〳〵イヤナ世ノ中ヤ

いかがしむいたれ中にそのバクはよのうれるすれきこえこざらむ

○ドノヤウナ深イ山ノ中ニスンダナラ　此世ノ中ノウイヲガキコエテコヌデアラウゾ

そべてかやうにいたれ中といつるハ皆とぐ岩のとちめぐれる所のよし

にて深き山の中にいふし。まことに岩窟の内をいふにそなりけれ。

あしぴき(清)の山乃まふくしからもなむうき世中ハなるかひもなし

○山ノオクヘドコマデ(まふく)ナリモカクレウゾ　此ヤウナウイ世中ニハ住デ居ルセンモナイ

よの中のうきくにあきぬおく山乃このたにふもるゆきやきなまし

○世中ノウイヲニアキハテタ　モウドコマデナリモ　四　ユキグレニ(五け)奥山ヘカクレウカシラヌ(やまし)

おなじもじ所きな　ものゝべのよし所

世のうき見えしぬ山路へいくむにハ思ふ人こそほぐし所わりけれ

○世ノ中ノウイヲヲ見モ　此メモセヌ　山中ヘハイツテ住ウト思フニハ　ドウモ見ステラレ

又人ガアツテ　ソレニサ　ツナガレルワイ

山乃おくしのもとへ法かけしきる

元河内躬恒

よ後をてし山りいる人山りても所をうれしきハいづちゆくらむ

○法坊(ゴ)括モ　山ニオスマヒヂヤガ　ソウタイ　世ガウイト云テステヽシマウテ　山ヘハイツ

タ人ガ　山ニスンデモ　ソレデモマダヤッハリ　ウイ時ニハ　ドチヘイクヿヂヤ(らん)シリマセヌ

○意境六　○廿二

相思ひける時いとき好きこと絶えてよ知る

いかたらふ何おしいづら世作れ子のうれふしたぐきよとはたらだや

○此子ハマアイマサラナゼニ生レテキタヿヤラ　何ニツケテモ此ヤウニ　ウイるノオホイ世

チヤトハシラヌカヤイ

題しらず　よしくしらば

よふ姉もばえれ紫志筆記呉竹のうきふしごとふうぐひすぞなく

○云ニアレバ　ナンノカノト　人ニイロ〳〵　三　ウイるヲイハルヽヿガ多ウテサ　ソノ度ゴトニ

うぐひす　泣マス　○手秋云。結句。蔦のごとくまぞなくといふまでも。

本ふとあらば蔦ふもあらぬ作れよのはしふ家身ハなりぬべらし

○ワシハ木デモナシ草デモナイ　竹ノヤウデ　ドチラヘモツカヌ物ニナルデアラウヤウニ思ハル

何ら人乃いたくしるかりのうとてれうとなると

自が身からうれよのなかと歎きつゝ人のとめさへかれしかるらず

○ナンジフナ身ハツヲ〳〵サテモウイ世中カナ〳〵ト歎イテ　ソシテ人ノタメニ〳〵デ世中ガ悲シウ

思フテヤラレルガ　此ヤウニ世中ノウイノハ　家身カラノヿデコソアレ　人ハソノヤウニモアルマイニ

下ドウ云ヿデ人ノタメニ〳〵デカナシウ思フテヤラルヽヿヤラ　餘材とがつり

おきれ思ひ　れがされて待ける　ときふよめる

しるかむらの朝光

思ひきや　むなれ　ほう　ほふおとろへて　海士の縄　○清渇　たぎいさり　せむとハ

○遠イ井ナカヘ別レテ来テ居テ　此ヤウニオチブレテ　猟師光ノスルシゴトヲマアセウトハ

思フタカイ　思ヒモヨラナンダヿヂヤ　○手秋云。なかはとぎハ縄とぐりし網縄釣縄なども

くすれへおきとるを。しぬぐりよせるとぎをいへり。

○遠鏡六　○九三

田村の御時に事にあたりて津の国のすまといふところに侍
りけるに宮のうちに侍りける人につかはしける
在原行平朝臣
わくらばにとふ人あらば須磨の浦にもしほたれつゝわぶとこたへよ
○京デ身ガヽリヲ誰モ問テクレル人ハアルマイケレドモ　モシモシゼント問テクレル人モアツタ
ラバ　身ハ須磨ノ浦デ海士ノスルコトヲシテ　キツウ難義ヲシテ居ルト云テ下サレ
左近ノ将監とけて（ノ役ヲメシアゲラレタル）侍りける時に女のとぶらひにおこせたりける
返りごとによみてつかはしける　小野のはるかぜ
あまびこのおとづれじとぞ今は思ふ我か人かと身をたどる世に
○ワタシモ御存ジノトホリノ仕合セデ　メウワク致シテ　我身デハナイカト存ズル

○時節ニ　カヤウニ御訪（オトヅレ）下サルレバ　今デハモウハヤ　天人ノ御為子下サレタヤウニサ存ジ
マスル　サテ〳〵御深切ナヨウコソ御為子下サレタレ　あまびことは。天上の人をい
へり。抄物どもにこゝをかきとかれしより。餘材抄に山彦と同じと見て。説（トキ）く
ことはかなはず。こゝとは言よわり。誤まりてまぎらはせるも多し。さや。集中
あまたあれども。あるは山彦のよみ。おほぞうごとよめり。但しかなはぬも後
にあまし写しとりてあるは。そのはみえずれども。あるは山彦に
まがへしとも。すべてもあやまりて。思ひあやまりておもひ
つかさとけて侍りける時よめる　平さだふん
うき世には門させりとも見えなくになどかわが身のいでがてにする
○オレハ門ヲサシテ出入セヌヤウニモシテハセヌニ　ナゼニ我身ノタメニハ　ウキ世ノ中デ此世ニ

出ヌコヅイ

四句ハ心のるの、などか此下ふくみして見べし。さて出がてをかてに解たるすゝるハわろし。これハ宿をさらずゆくハつゞくに外ゞ出べきをそのうし外ふあらバ出がてとよめるなし。

ありはてぬ命まつまのほどばかりうきことしげくおもはずもがな

○イツマデモ生テ居ル命デハナイ オツヽケ死ヌルヲ待ツワヅカノ間ヂヤニ せメテソノ間ナリトモ ドウゾ此ヤウニツライ苦労ノオホウナイヤウニシタイモノヂヤ

みこの宮のたちはきに侍りけるを宮づかへつかうまつらずとてとけて侍りける時によめる　みやぢのきよき

つくばねの木のもとごとに立ちぞよる春のみやまの陰をこひつゝ

○筑波山ノキツウシゲツテアルヤウニ広イメグミノ深イ春宮ノ御蔭ヲ 此上ナガラドウゾト頼ミニ存ツテハ ヒタスラ其陰ノ所ヘヨサオレタイナニスル　餘材上の句の説わろし

時なりける人のにはかに時なくなりて歎くを見て みづからのなげきもなくよろこびもなきことを思ひてよめる　清原ふかやぶ

光なき谷には春もよそなれば咲てとくちる物思ひもなし

○日ノ光リノアタラヌ谷デハ 春モヨソノヿデ 花ノサクヿモナケレバ ソノカハリニ 又早ウ花ガチツテ惜イト思ヒモナイヤウナモノデ オレガヤウニ本カラ花モサカヌ身ハ 人ノ今度ノヤウナ歎キモナケレバ ケツクコレモマシカヤ

かつらに侍りける時に七條の中宮のとはせ給へりける御返りごとにたてまつれりける　伊勢

むさかる秋中におひたる里なれば むかりの秋のこゝぞ 秋里べら 秋風

○此里ハ月ノ中ニハエテアルト中シマスル 桂ノ里デゴザリマスレバ ヒタスラアナメ様ノ

光リヲサ 秋ミニハ殺シマセウト 存ジマスルワタクシハ 后をバ月にたとへなることし

きのうしさぐがつそれ 今日は出下サレト まかりける時にうゑのたな

むまをむとて 今日は出下サレト ひにおくりきる時にたてかしこに

まかるとありきて 春ふらるまでみてざりけ 猶ばつかけしける

なりしかれば

今ぞ思ふるしたものと人まとむ里をバ 今日ぞ 今日ぞ 今日ぞ

○人ヲマツノハ ナンギナ物ヂヤト云フヲ 今日サ始メテ知リマシタ コレナレバソウタイ 人ヲ

待テ居ル取ヘハ ブサタヲセズニ 早ウイテヤルベキコデゴザルワイノ

こゝろしられみこ乃もやらにまかりかりひける秋 親王 かしらお

ろしてふみとゝ以ふとゝろに侍りけるに 正月 ナリヒラ にそふらハ世

とて侍うりとるとまるに 小世ハ 見えれ山乃ゆきとなりけるを雪

いとふかくつもりしひくかの 居室 むかりしまかりいたりてをが

みけるに侍るべしとしていとあるかしくてかつりまうで

きてよくておくり 家ゐ

和さ猶てもそうとぞ思ふおもひきや雪ふとかて君をみむとハ

○涼イ雪ヲフミワケテ トホイ山里ヘ糸ツテ 君ニ御目ニカヽリマセウトハ 存ジマ

シタカイ 存ジモヨリマセナンダコデゴザリマス ソナタヘ法籍リナサレタコヲフトワスレ

テハ コレハマア 爰デハナカツタカトサ 存ジマスル

○左読六

○廿六

源家の里にしきて侍りて京へまうでくとてそこなり
ける人によみてしおくるときる
年ぬへてきゝしし里をいでゝ以前ばいとゞ源家里とやなりなむ
○年久シウ住キタツタ此里ヲデヽインダナラ　タヾサヘ源家ノ里ヂヤニ　イヨ〳〵
アレテ草ノフカイ野ノニナルデカナゴザラウ
加尾しし　よそ人しらぬ
里とおもしがうづらと鳴て年ハへ里かなふにぞにやハ君ハこゞしらむ
○サイナア此里ガ野ニナツタナラ　ワレハ鶉ト同シヤウニ泣テ月日ヲタテヽスデゴザ
ラウニ　モウコレカラ　オマヘハ　セメテ　チヨツトモ　ハ出ナサルマイ　ハレウケンカヱ　ソレヤアン
マリデゴザリマスゾヱ
かりふきうづらを狩りよといふによせたり。

親しらぬ
家を君なふれはこゝろにはしかばうれめ我ゝつ乃何万と知りふき
○オマヘガ　ワタシヲナンデモナイモノニナサツテ　ウイメニアフタユヱニ　ソレデワタシハ此雖
彼ノ三津なへ糸ツテ尼ニナリマシタ　雖彼浦・三津・海布・海士ハてもそそなり
此あハわる人むかしをとこみるをうれのをとことも
ぞ知りふれとば雖彼のこゝろ乃ちふまかりて何万ふな
ことよみくをとこふつかりをりきるとなむいつる
可へし
なふれがこゝろむべきまもおもれしぞいづこ我ゝつ乃海士とかハれ為
○ワレハソノヤウニソナタニ恨ミラルヽヤウナ　ナンニモ覚エハナイニ　何ヲマアフソクニ思

○芝徒六

○廿七

ウテ尼ニハナリヤツタゾイ　俌をみるべきるもおきふいづもの取を
みるぞといつるをもてしるし。るといひいづことといつるふ。心を
はくべしさてそのるといひいづことといつるハ。くぐ詞のしるて乃方
のこふて。家ハ主ふハあらぬ。此ハ家をよく見れまへぞハ。まぬる
べし。家のこハ。恨ふるべきこもおぼしぞ。何事をうらえてといふこと。
今さらふこふべき人もおもはしぞハ宣むぐらして門させりてへ
○子供ヨ　アレ案内ガアル　カウ云テヤレ　今ニナリマシテハ君下サレサウナハ方ハ
オボエガゴザラヌ　此方ノ内ハ　イクヘモシゲツタ葎（ムグラ）デトヂテ門ヲサシテゴザルニヨ
ツテ　アケラレマセヌト云テイナセヨ　此家ハ心の返しハ。ともふハ。何らぬ別（コト）ゑし。
友しぶちハ久しう御うでこぎりハるもなふよみくハ。

たし。家る　こつる
家のおもふおふるハつきハ。うれ家ハ。うきこと何もや根を絶てこぬ
○上　ナンゾ此方ヲ　フソクニ思召スるガゴザルカシテ　チカゴロハトント　打絶テハ出
ガゴザラヌ　ケシカラヌオミカギリデゴザル　○子秋云。結句根をといつるハ。くぐ上の
うきまの縁ふいつるにて。家のこまハおづからぬ。
人をこひで久しう有ハるをりふ何ひ。うらしをもバとゑる
何ひハ一本ふ。何ひてとあるぞよろしかるべき。
家をもてゝゆきやしふハむ思ふよりも。ほかねるものをんわりハるも
○オウラミハ。むデゴザル　拂者モナニカト　捜（ヨントコロ）ナイるゲ。ニトリマギレテ　存ジナガラ久
シウ心外ニハ。無沙汰ヲ致シタ　下　家身ナガラ心ニ思フヤウニハナラヌ物デゴザルワイ
身ハ家ヲナレバ　ドウナリト家心シダイニナルハズデゴザルニ　心ニ思フヤウニナラヌノハ

○志読六　○廿八

ワレガ心ハ　身ヲバ捨テオイテヨソヘインデシマウテ　心ト身トガ別々ニナッタカシリマセヌ　やきん

餘材よろしからず。　下句ハ、心に思ふよりほかなる物ハ身なりけりを

まといふことを物をさハいひかへられたるにて心なりけりとハいへるなるべし。

むねをかのおほよりがこしよりまうできたりける

時に雪のふりけるを見て　おのが思ひはこの雪のごとく（ワレガ身ヲオナツカシウ思フ思ヒハ）

なむつもれるといひけるをりによめる

君が思ひ雪とつもらば頼まれず春より後ハあらじとおもへば

○オマヘノ思ヒガ雪ノヤウニツモッタナラ　ソレヤドウモ頼ミニナリマセヌ　ナゼトイフニ

ソシナラ春カラハモウサウハアルマイト存ズレバサ　雪ハ春ニナレバミナ消マスゾヤ

かへし　　　宗岳大頼

きみをのみ思ひこしぢのしら山はいつかは雪のきゆる時ある

○イヤ〳〵サウデハゴザラヌ　君様ノ事バッカリ思ウテ　ワシガ來タ北國海道ノ白

山ハ　イツサ雪ノ消ル時ガゴザルゾイ　佐様ナ及ビデモアラウガ　白山ノ雪ハ春デ

モイツデモキエハ致サヌ　ワシガ思ヒモソノトホリデゴザルゾヤ

こしなりける人につかはしける　　きのつらゆき

おもひやるこしのしら山しらねども一よも夢にこえぬ夜ぞなき

○君ノコトヲ思フテ遣ル我心ハ北國ヘ通ヒマス　ソレデ白山ト云所モドンナ所カシラ

子ド　毎夜心ガカヨフニヨッテ　其白山ヲ夢ニコエヌ夜ハ一夜モゴザラヌ

題しらず　　よみ人しらず

いざこゝにわが世はへなむ菅原や伏見の里のあれまくもをし

○モウレウチンヲキハメテ　ワガ一生ハ　此伏見ノ里ニ住ハテウゾ　オレガモシヨソヘ　移テ
インダナラバ　此家ガアレテシマウデアラウ　ソレハマアイカニシテモ　[illegible]ナコヂヤニ
[illegible]ハ　みを　此山本　[illegible]しくハ　[illegible]ひきませ　杉ノ立テアル門ガソデゴザンス
○ワレガ内ハ　三輪ノ山ノ麓ヂヤ　[illegible]タクバ　[illegible]テ　[illegible]　杉ノ立テアル門ガソデゴザンス
きせん　法師
私ガ　庵ハ　みやこ　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
○ワガ庵室ハ　京カラ辰巳ノ方　[illegible]カラヌ　宇治山ト云　処ヂヤ　外ノ人ハ　此山ニ
住デ　ニテモ　京ガ近イユヱ　ヤツハリ世ノウイ　[illegible]ガアツテ　ドウモスマシヌ　山ヂヤト云
ヂヤガ　拙僧ハ　コレ此　[illegible]リニサ　年久シウ住デ居ル
餘材ニ　他人ハ　山の名を　うぢ山と　[illegible]　[illegible]

[illegible]し。さて　[illegible]のこゝろとしもいつるハ京ハ　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
○此家ハ　アヽハレキツウアレタワイ　此ヤウニシテ　何ニ年ニマアナル　家ナレバ　昔住ニダ人
ノ音ヅレモセヌコヅ　サダメテ住ニダ人ハアツタデアラウニ
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

わび人のすむべき宿と見るなべに歎きくははる琴の音ぞする
○此家ハナンデモナイ人ノ住ムヤウナ家ヂヤガト見レバ ソレニソヘテ又ソノ歎キノソフ琴ノ音ガサスル
はつせにまうづる道にならの京にやどれりける時
よめる　二條
人ふるす里をいとひてこしかどもならの宮こもうき名なりけり
○京ハ人ノワレヲフルイ物ニシテ見ステタ所ヂヤニヨツテ イヤニ思フテ出テキタケレドモ
此奈良ノ都モ フルサトヽ云ナレバ 同ジクフルイ物ニ思ハレルツライ名ヂヤワイ
題しらず　よみ人しらず
世の中はいづれかさしてわがならむゆきとまるをぞやどとさだむる
○モノゴト定メナイ此世中デハ イヅクイドノ家ガ コレゾト云テ 定マツタワガ家デ
アラウゾ 定マツタコトハナイ ドコデアラウガ イキトマツタ所ヲサ オレハ家ヂヤト思フテ居ル
逢坂のあらしの風はさむけれどゆくへしらねばわびつゝぞぬる
○此相坂山ハキツウ嵐ガフイテ 夜ルハ寒イケレドモ 所ヲカヘテドコヘイタトテモ サキガ又ドノヤウニアラウヤラ知レネバ ナギナガラモ シンバウシテコヽニサカウレテ寐ヽスル
風のうへにありかさだめぬちりの身はゆくへもしらずなりぬべらなり
○ドコト云コトナシニ 風ニフキアゲラレテアルク塵ノヤウナ 何ニデモナイ此身ハ ニテウドソノ塵ノヤウニ ユクサキハドコヘドウナツテユカウヤラシレヌヤウニ思ハレル
家をうりてよめる　伊勢
あすか川ふちにもあらぬわが宿もせにかはりゆくものにぞありける
○アスカ川ノ淵ハコツ瀬ニカハル物ヂヤト 聞及ンデ居レ ソノ飛鳥川ノ淵デモ

オイワシガ家モ　不仕合セナ時節ニナレバ　淑ニカハツテユク物ヂヤワイ　淑ニト
云ノハ　ソレアノオアシノフサ　ガテンカヱ
つゝしに侍る時にまかりあひつゝごうちきる人のもとに京に
くりまゝできてきしける　きの友のり
あるべきにしごとをしてしばをのゝえれくちし取ぞ忘しかりける
○京ハ右衛門（コキヤウ）ナガラ久シブリデモドツテアルマスレバ　何るモキツウモヤウガカハツテ
先年ノヤウニモナウテ　シラヌ取ヘ糸ツメヤウニゴザル　ソレユヱ　ヤ様ト毎度　碁ヲ
ウツテ　何るモワスレテ面白ウクラシタ　ヤ様ガサ　忘シウゴザルワイナ
如ともごちと物がたりしてとかまて後につかりしは家
みちのく

あらざわし　袖乃中にや入にまむとがゝあしひのなきこゝちとする
○ワシガタマシヒハ　オノコリオホウ存ジテ別レマシタオマヘノ袖ノ中ヘハイツテ
アナタニトマツテアルカ存ジマセヌ　サウカシテ　アナタカラ取リマシテカラ　トツト
ワシハオマヘノフバカリ思フテ　ウカ〳〵ト致シテ　タマシヒガコヽニハナイヤウナコヽロモチ
デゴザリマス
完平清時にしも侍こしれ　判官任
ゐる時に東京のさふらひまてをのこどもさけしるべゐるつ
いてにふらと侍ける　ぬぢいられしるべふさ
なよ什れよ長紀うへに神京乃おきぬてものゝおもふころかな
○此節（五ノ巻）　夜ハ長シ　竹ノウヘハヤ初霜モオイテ　寒イニ　寐（子）モセズニオキテ

居テ 遠イ別レノ物思ヒヲスルヿカナ　此遣唐使ハ.扶桑畧記
に寛平六年八月廿一日に.停詔ありしよしみえたれば.そのころの歌なるべし。
歌しらず　よみびとしらず

○一二 風ふけばおきつしら浪たつた山よはにや君がひとりこゆらむ

アノ立田山ヲ 夜ガフケテカラ君ガ タツタオヒトリ コエテ御出ナサルデアラウカ サテモ〳〵アンジラルヽヿカナ

立田山のうた.古今に或人のいへる説よろし.但し立田川ハ.おのも別に考へあり. ○千秋云.此立田川の師の考.いかゞ まの一の巻.又二の巻に出たり。

ある人此歌ハむかし大和の国なりける人のむすめにある人すみ
わたりけり此女おやもなくなりて家もわろくなりゆくあ
ひだに此男かうちの国に人をあひしりてかよひつゝかれやうに（大和ノ女ニハ）
のみなりゆきけりされどもつらげなるけしきも
見えでかうちへいくごとに男の心のごとくにしつゝいだし
やりければあやしと思ひてもしなきまに（ルスノ間ニ）こと心もや
あるとうたがひて月のおもしろかりける夜かうちへいく
まねにてせんざいの中にかくれて見ければ夜ふくる
まで琴をかきならしつゝうち歎きて此歌をよみて
ねにければこれを聞きてそれより又ほかへもまか
らずなりにけりとなむいひつたへたる

たがみそぎゆふつけ鳥か唐衣たつたの山にをりはへてなく（をりをへて）

○三 此立田山ニ 誰(タガ)禊(ミソギ)ヲシテ ハナシテオイタ鳥デアルヂヤカ サキカラヒキツ

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡』 請求記号 特1-844　ガラス使用

ヅイテ久シウ鳴ク　本縁付鳥の説。鉢材を結し。

ほとゝぎ猶是時志のべとゝぎ古歌ゆくへも志らぬ跡をとゞむ家

○人ハドウナラウヤラ　三　四　ユクサキノシレヌモノナレバ　後ニモシ人ニ忘レラレタ時ニ

コレヲ見テ思ヒダセト思ウテサ　此通リニ物ヲカイテ手跡ヲノコシテオキマス

点観ノ時萬葉集ハ[イツジブンニ]ゼかりつくるぞとく　ハせ給ひ

ほどバよみてなりける　ぬもやのあるとも思

かゝる月時雨ふりおけるなら時もの名ふおふ家時ふるおとぞこら猶

○上　五こ巳　コレハ奈良ノ宮ノ此時代ノ古[フル]イ書デゴザリマス　又ハ奈良ノ宮ノ

御時代ニ古歌ヲ集[アツ]メタトヤス　集[シフ]ガサ　此五こ巳万葉集デゴザリマス

ならの柴時名ふおふとハ楢の柴時名ふつきてけるといふことにて。

もれもち奈良といふことし。時雨ふりおけるとハ見づらし。

寛平ノ此時奇しくてまつるときるついぞくかなりける

大江千里

何しらげ乃ぶりおくとて初く春ハ雲時うへまで　此ハ此時

○世ノ人々ハミナ立身致スニ　一　家一人オクレテ工立身モ致サズ　歎イテヲリマ

スヲバ　誰モ申上テ下サル人ハナイコカヤ　ドウゾ此様子ヲ上[カミ]ヘ申シ傳ヘテ下サレカシ

ぬぎハらけ時うちおれ

人もとぼおもふ人もなる家庭しゆち出て君が見ぬもみてなむ

○人ニハイハズニ　我[カ]金ミ親フ事ノアル此心ハ　ドウゾ春ノ庭ノヤウニタチ出テ

上[カミ]ノ御目ニモ見エヨカシ　ソシタラ此親皇ノ叶ウコモアラウニ

○巻後六　○卅四

うゑ出しきる時にしなるとてよみてしおくふかれつゝまて
とてはつりける　伊勢

山川乃青にのミまくもしきしはみをたやながらへるよしもゞ相

○三 清ノ所ノ御手ハ　モウタヾ今デハ　一　青ニバカリ　ウチタヽハツテヲリマシテ　ウチ
タエテ上リマスルヿモゴザリマセヌガ　ドウゾマヘカタ宮ヅカヘ致シテヲリマシタ
トホリノ身デ　今モ糸ツテ見マシタイヿヂヤト致ジマスル

古今和歌集巻第十九を鏡

雜躰

短歌

題しらず　よみ人しらず

うふてる時　まれなるいろに　おもひそめ　己が身ハつゝみに
あるぐもの　たまとしなく　婦じの孫の　もえつゝとハに（ジヤウヂウ）
思へども　あふてかたし　相ふしかも　人をうらうむ
ことつゝる時　おきしはふり先て　おもひてし　おもひハ今ハ
いとづらり　なりぬべらし　ゆくあ乃　しかゆる時なく
かくれたに　思ひこゞれて　ぬる事時　事時バ事ぬべく

○並鏡六　○卅五

おもへども　えぶ（ボンブノ身ナレバ）は身なれば　なれやうぞ　おもひハふかし
つのしらの　山志ゝ多乃　こがくもて　しゆぎしんを
しゆもふかも　あひかたらハ雪　色ふいでば　人（人ガシラウヤウニ思ハレルニヨツテ）しりぬ蒼ゝ
そみぞめは　ゆふべふ形もば　むりぬて　あ（アヽハレアヽハレト）ちもくゝ
なかぎつのり　をし（センカタナサニ）たべなゝふ　庭り出て　しちやたらへだ
しろしゆへ乃　衣乃そでり　おく露乃　きれどきぬべく
おりへども　猩なげかもぬ　春がたみ　よそふも人り
つたく猩と思へだ
ぬるうゝなりし時のもくろくはそのながうゝ
清しゆき

ちかやぬる　神の代たり　くも井の　よくふもしたぞ
ある夏の　青羽乃やまの　春がたゝ　思ひみだもて
さゝぐれの　そらもとゞろふ　さよぬけて　山ふくしぎも
おくごとふ　しゆもも孫さゝて　かゝふしき　しゆりとの山乃
もみぢ紫を　見てのゝ志のぶ　神なげき　志ぐもくて
冬は私乃　庭もたゞもふ　ふる雪は　猩きえかつり
としごとふ　とれふつけつゝ　つたもてふ　志ゝぬいひつ
君をのゝ　多代よといたふ　君は人乃　思ひたる身が
ふじの孫の　もゆる思ひも　あかぎして　こかゝくれえど
ぬぢごろも　おもるころも　やちくさ乃　えは紫ごとふ

をへらぎの　おおせかしこと　まれくれ　中ふ法くすと
いせの海の　浦乃しおがひ　ふろひあつめ　とれるとされど
しまるれを乃　みじかれころ　思ひあへぬ　おかたうらしあの
年ぬへて　大宮ゆのこ　ふさかたれ　ひるよるかなど
法ふとて　かつりこもをぬ　しが屋ど乃　思ぶ事おふる
いる海ふこと　ふる春雨れ　もるやしぬらむ
ふるうとにくそへてくしてまつまるながうこ
壬生太岩
くまし行乃　よくれふること　なりるとをば　いかれのぬよ乃
以ふして　おもふころを　のぞへまし　ふれまむかしへ

アツタトイフ
あるれてふ　人まれてそれ　うれしはし　身ハ志も相がら
立の紫ぬ　あまつ宮まで　きてしあげ　を志の世までの
ふとくれし　今もおおせ乃　くぐまゆれ　人マロノアトヲツゲトテヤラ
ちるれ身ふ　つもまることを　ちりふつぎとや
いましへも　くまるもきがせる　こまをおもへぞ
こくちして　ちぐれなきけも　あるしれ　こゝろぞ
ほこらしき　かくハあまども　て流しかるを　ちかれまもるの
身ぬりしぬ　くまりは秋乃　くるかたり　ふぎむき出て
みかきよると　とれへもる身の　ミかきもると　をさくしふくも
おもおしぞ　こくのうきはれ　中ふてれ　あらしの風を

大芝ヌナヨナレ

○茎鏡六　○卅七

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡』　請求記号 特1-844　ガラス使用

きゝぢのき　今ハ雲山し　ちかきまだ　春ハ霞ゝし
しゐれぞかまし　夜ハうつきゝ　ねきくらし　秋ハ時雨ゝ
袖をかし　冬ハ霜まぞ　せゝらゝ流ゝ　かゝるまびしき
月ねがらふ　清もまる年を　志るきまだ　いつのむつふ
なるまふかり　こまふそハまる　ゝくしれ　おいのうぞさへ
やよ(ヨナイニナツタレバ)ハ　月ハいやしくて　としまかき　さまれ[illegible]
かくしつゝ　ながらの橋乃　ながらへて　ねふれの浦ゝ
しゐ川浪の　なゝれ志まふや　おゝまま　さまがふいのち
をしハまバ　こしれ玉なる　志らや万れ　かしらハ志ろく
ねりぬとも　おとゝの澤乃　春にきく　おいぞ志ねぞの

くまりとの　天が八千代を　まかんつゝ見む
やよきまバ　今の世れ云ふ物の多きれ　よきれとも　よろきをともいふ
こまし　よきいれ　餘計なるの字考ゝとも　此也見まど　結ハ行くし
右云ねるべし　餘材ふ行る　佛足石ノ歌の　夜与(ヤヨ)都(ツ)も見し　よきいといふ
れ　やを畧きるし　此やよハまバを　弥過(イヤヨギ)まバといふ説　むがてし　数乃
ゐる(ヨギ)といふ　あべくもなれば　又打ちふ　さへぎるてくなるも　いたまど
天が代ゝしなふ　坂山乃いたしあこがくまくわとおもひなる式
○カヤウナアリガタイ君ノ治世ニアウ時節モアルモノヲ　今マデハタヾヒタス
ラ　ウヅモレテ居ルコトバツカリ思フタコヨ　アハウナコカナ
冬のながうて　凡河内ノ躬恒

ちはやぶる　神な月なりや　ひさよりは　くりりも行へだ
うち志ぐれ　和紫とりとに　ふるはなれ乃　よし里の山の
山あらしも　寒く日ごとに　ねりゆけば　玉の手をとりて
あきちらし　あら猪こぐれて　霜こなり　いやうとまれ当
座の面り　むらくこゆる　冬くさの　うへにぬりしく
志ら雪乃　はりしくて　行ら方の　年の御あるとも
まづしつるかの邪

七條后うせ給ひけるのちによみ給ける

伊勢

おきの浪　あれのこよさる　家の方うちは　見へてもみし

いせの海士も　船ながしゝ後　こゝちして　よらむかたなく
かれしきに　浪の山路乃　くれぬれ　まわらがなか所
時雨りて　秋のもみぢと　おとぐれ　おのがちりぐ
まかれなば　粉雪かげなく　ねりをてゝ　見るものとは
花もしき　君ねき座に　むれとちて　宮の御まゐりぞ
ちりの　ねき浪をつ　よそにこそ見め

旋頭歌

鶴しらぎ　よみ人志らず

うち浪をちかた人にし抱まりけれ。そのそこに志ろく咲る
そなにの花ぞも

○ウチアワタス アチノ方ノ人ニ ワレハ物トヒマシヨ ソノソコニ咲テアル白イ花ハ ナンノ花デゴザルゾマア サテモアルナ花ヂヤ 打後ニハ、アルトモ云ヒ、古今ハ例皆然リ。

かへし

まちさきバ 倩 聞 みべこしまげさくアルまでつかぬ花。まひなしふるゞ和のるべき花ハ名なきや

○コレハ春ニナレバ野ヘンニ一ヅ一夜ガケニサク花デ アテモ〳〵アアカヌ花デゴザルガ 其名ハ何シゾツカハサレ子バドウモナノサレヌ タヾデナスヤウナヤスイ花ヂヤ ゴザラヌ へく〳〵へく

○本秋云、まひとハ、人ニ物を贈るをいふ。今後ハいふまひなひよハ、かぎらぬ。

題しらず

たりを川ふる川のべに二本つる杉 年ゆへてし又もつひ見む

二もおもつる杉

○上 年ガタツテ後ニモ 主子テ又ハ目ニカヽラウ 上三句ハ、年をへての序ニや、又稲掛ノ大平がいたく、上ハ又といはむ序し、二本つる木の岐(ニハ)のまふつゞきとるし。

法らゆき

天がさはみかさの山乃もみぢ葉の色かゝ月しぐれの夜のそめる形りはも

○一 三笠山ノ和葉ノ色ハ ドウシテアノヤウナヨイ色ニナツタカト思ヘバシグレノ雨ガシミツイテ染(ツヽ)ツタノヂヤワイ そ見るハ、そこしらるといふこし。俗云ふ、そむることを、そめるといふとハ異なり

誹諧歌

題しらず　よみ人しらず

梅ノ花見ふてそ来つるうぐひすの人々くといひしもをる

○梅ノ花ヲ見ニキタノデコソアレ　ドウモスルコトデハナイニ　ナゼニヤラ鶯ガ人ガクル人ガクルト唱テ人ノ来ルヲイヤガツテマア居ル

素性法師

山吹の花いはゞこそもぬしやたれとへどこたへぞくちなしにして

○此山吹ノ花ノ色ノ衣ハ　ヌシハ誰チヤト　トヘモヘンジセヌ　山吹ハ梔子ノ色デ口ガナイニヨツテサ

藤原敏行朝臣

いくだくの田をつくるばかほとゝぎすしたでの田長は何なく　よぶ

○ドレホドノ田ヲ作ルトテ時鳥ハアノヤウニシデノタヲサヲ毎朝〳〵ヨブコゾ

七月六日ゝ朝だくの時ゝ行をよそゆる

藤原ノ加祢さを

いかしかとまたくしむをたれにかはしてまの川原をゆかやはらむ

○今日ハ六日ナレバ　天ノ川ハ明日ワタルヂヤケレバ　牽牛ガ此イツカ〳〵ト待チカ子テ居ル心ヲ　織女ニ見セウタメニ　今日渡ラウカシラヌ

人ふ梅をかくと聞りし見ることは右の御ふ　たれにあぐといふことのみしかるべし　去年日記ふいつるも　まことしは今ふてハ結ひしるんを見をむとめふ七日ふ後るべきを六日に後らんといつるし　さて脛をかく

ぎて後るゝことかゝるなり。たのめくゝ見ざれば、心をといふ詞。味ふべし。

訓しらぎ　　凡河内躬恒

むつごもまぐつきなくにあきぬ色りいづらは秋乃長してふよは

○ムツゴトモ一ダ皆マデエ云ハヌノニ　ハヤ夜ガアケル格子ヂヤ　秋ノ夜ノ長イ

ト云ハ　ドコガ長イゾ

僧正遍昭

秋乃望ニ物ゐ見きとてる女郎をあまかしかまし花もむとくき

○秋ノ望ニアノヤウニ女郎花ガ大ゼイ　ヂヤラクラト云テ立テ居ルガ　アヽヤカマ

シヤ　アノヤウニ花ヤカナモ一サカリノワヅカノ間ノフヂヤ　オツヽケシボンデ見苦

シイ物ニナルフヲバシラズニアヽ

よみ人しらず

秋くまば望べりしゐはるゝをみなべしいづきの人ゐ法ゐでゐるべき

○秋ニナレバ望ヘンニ　ジヤラツイテ居ル女郎花ヲ　来テ見ル人ハ　誰デモツメ

ツテ夕ハムレルツメツテ見ヌ者ハナイ　法むき花を摘をゐるゝ

秋霧ゐ花繞てくもるゝ女郎花のまぐさぞ見しゐるゝ

○霧ガハレタリクモツタリスレバ　女郎花ノウツクシイ姿ガサ見エタリカクレタリスル

結句かゝるのかりじ清てよむべし。　餘材ナ吟ゆゑとふ。

花と見てをらむとくされば女郎をうとくゐるさあれば名にてそ見ゆる

○女郎花ヲ花ヂヤト思フテ折ラウトスレバ　女郎ヲンナト云名ハヒヨンナ名デコツアレ

ドウモ女郎ヲンナニ手ヲカケテ折ラレハスマイ　餘材ナ吟ゆゑとふ。うとくゐる

の注ゆれば、さべて雅言をとくふ。其本は言ふのこゝかづらひてハ、中々そ
抱どれくして、用ひるこゝに遠ふことを、しかれ文にまれ、その用
ひとるゝやうを、他の例どもを引合せて、よく考へてとくべきし。
寛平御時きさいの宮の歌合の歌　在原むまやな
秋風にほころびぬらし菊だゝ毎つゞ見させてふきりぐ、をおく
○菊袴ガ秋風デホコロビタサウナ　ソノホコロビヲツヾクリサセくト云テ　キリぐスガナク
あを書くむとゝ、ゆる日とおりの歌乃ゝとよ見の歌
雪ゆ吹こしきるを見てそのとなりへよみくつかしゆる
きよいらの歌ふかや常
冬の歌がら春の歌と歌足の歌ちかきれば中垣ちかぞ花をちりきるに

○マダ冬ナレド　モウ明日春ガタツ今日デ　近イ春ノトナリヂヤニヨツテ　サカヒ
ノ垣ノウヘカラサソノ春ノ花ガチツテクルワイ
影さらだ　よそへしほど
いそ歌かゝぬりふし意乃歌さびてゝるゝ御ふ家ハいぞ祢りまつる
○何ンデモ年久シウナレバ　神ノヤウニ性(シヤウ)ガ入ルモノヂヤガ　オレガ意モ年久シウナツ
タユヱ性(ミシヤウ)ガ入ッテ　ソノ意ガタヽツテ　オレハサ夜ルモエ子ムラヌ
枕より跡とる意乃せ色くもばきむかゝ歌ぞとこ歌ふ本体
○オレハ夜ル子テ居ルノニ　枕ノ方カラモ　跡ノ方カラモ　両方カラ　シキリニ意ト
云(ツ)鬼メガ　せメヨせテクルニヨツテ　跡ヘモヨラレズサキヘモヨラレズ　ドウモシヤウガ
ナサニ　床ノマン中ニサ　ヂツト起(オキ)テ居ル　なるハ臥(フサ)ぢして座して

ゆるをいつ。ゃうもちるハ倒皆紙ヲ上。法のことはし。
打ヌル。ゑを泥(ヒヂ)うれしてそ〳〵。そつゐるハ弓縁〳〵。
ゑ〳〵きゞ(個)かくもうくそてつゐとときみけしそれをヨゞもかきそちもる
○ドノヤウニゑヲスル人ノ形デモ ヤシレナガラモ ホンリナガラモ
キケ ソレニオレハ ゑデ心ガ心デナケレバ 立テ井テモスワツテ井テモ 叶身躰(カラダ)ガドウ
ヤラ ゑイヤウナ心モチガスル ゑ〳〵きゞかくとハ。ゑをもる人の身躰(カタチ)をい
へるし。なきこゝちをるハ。其身躰のなきやうなおもひするし。かるゝおきうもち
うちしてをどいつまゐ日ゞ。ゐそをもをれぞとゝいふも。身躰ふつき
ていつるし。んぼつ〳〵べ〳〵。飯村井ゆとふ。上下ゆうきを会かゐぞ。
うちぬやとそ〳〵ろこがてう〳〵ゑ。孫(ムマゴ)がとうふまでぞゑ〳〵紀

○アハズニモ居ラルヽモノカト ニタメシテゑガテラニ ニアハズニ居レバ ソシナジヤウダンゴモ
シテゑラレヌホドサ ゑシウテ ドウモ ゑゞニハ居ラレヌ
みゝかし。ちゝ山乃ちちなゝえてゝがな ゑひゐ乃下ぞめふきも
○アヽ耳ゑし山ノ支子(クチナシ)ガホシイ物チヤ ゑノ色ヒノ色ノ下染ニせウニ ソレデ下
染ヲシタメナラ 忍ブ色ヒヲ耳ゑシデ人モエ吸(ヒク)マイシ ロナレデ人ニゑレモスマイホ
ドニ ソレテ色ヒトゑニヒノ字ガアルニヨツテ緋(ヒ)ノ色トゝモチヤ
あゝ。ほゝき紙ゐ面乃そゐづおのをさへ。ゑ
○山ノ田ノカバシヲゑルヤウナ汝(なゝ)女 ワレヲノゾンデ逢(ヒ)タイトイフ サテモイヤラシ
イコヒツタコヤ 人をいやゝゑてても。おのをとゝいふし。打ゆふ。
あやゝ紙ゑをさへとうハ。うれをぞ。

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡』　請求記号 特1-844　ガラス使用

きの先のなり

ぬじ姉孫のなりぬ思ひにもえバもえ神ぶにきてぬむなし煙を

○出来又意ノ思ヒニム子ノモエルノハ キツウ苦シイケレモ ハテドウモセウコガナイ モエルナ

ラモエヨサ 富士ノ山ノ神様サヘ エ消シナサレイデ ジヤウヂウ思ヒノ煙ニモエサツシヤ

ルモノヲ 人ヲハソノハズノコヂヤ 神ヲハ口の勾へつぐきて。ふじ姉ゆの神といふことし。

きのありとも

うひ見まく深しハ数なく有ながら人よりつきなきまどひてそまれ

○アヒタイト思フ心ハ腹一ハイ アリナガラモ 其人ニアハレル手ガヽリガナサニ ドウシタ

ラヨカロカカウシタラヨカロカトイロ〳〵ニ心ガサ マヨウワイ ソレヲ夜ルノ月ヤ星ノコニメ

星ハタントアリナガラモ月ガナイ如ニクラウテ居ニマヨフト云コニシタノガ俳諧デゴザル

小雲ノ小町

人よりうちもつきぬなきにハ思ひおきてむ孫なし里火にんやまをると

○思ウ人ニアハレル寄付ノナイ和ハ 其人ヲ思フ思ヒガ火ノハシルヤウニハシツテ胸ガモ

エテエ寐ズニ起テ居ル 二の勾にハヽ。和ハとうるなよ。よりじハ。

よを写し誤るし。さて二三の勾ハ。月のなき和ハ。月を思ひてといふ詞

のとしてし。又おきてに。熾をうちて。なし里火とハいつり。 餘材にかゆて

より思ひおきてと注しるハ。むごとし。さてハなし。こゞ思ひて起て居るし。

寛平ノ御時きさいの宮ぬ所会ぬ 藤原おきうぎ

春霞しるなびく雲べ乃ゆうぬにもなりしてしがな人もつむやと

○モシ思フ人ガツムカドウヂヤ 春ノ雲ヘンノ若菜ニマアナツテツマレテ見タイ物ヂヤ

若菜ハ誰デモツム物ヂヤワナテ　ツマレテアタイトハ　ツメラレテアタイト云フヂヤゾエ

若菜といつるを老たる人の若きを新ふことにあるハ是なり。ことにハなし。

影しらぬ　よみ人しらず

思へども猶うゑまぬ春がすゑかゝらぬ山乃ゆらじとおもへだ

○ワレガ思ウ人ハキツイ性ワルナレバ　方々ヘカヽリアルイテ　テウド春ノ霞ノ

ドコノ山ヘモカレコノ山ヘモ　カヽラヌ所ハナイヤウナモノデアラウト思ヘバ　思ヒナ

ガラモヤツハリ　ウトヽシイ心モチガスル

平貞文

春の野にしげき草柴乃ゆゑごひにとびしろ維のほろゝとぞ我く

○一二　オレハ女ヲ思フ思ヒガシデウテ　四　ホロヽトサ泣マス

上句ハ春の野にしげき草柴のごとく。しげき素意といふことし。草柴のつまと

つゞきたるにこれハ我し。折字なし。草にしたしとなるハ。ほろし。

きのよし　むと

秋の野にしげき素相き廉にしげ年御へてし我ぞ　ヨガ意乃かひよとぞなく

○毎年ニ秋ノ野デ　素ノアリモセヌ廉ガ　家意ノカヒヨヽトサナクガ　アレハ

ドウシタコトヂヤゾ　素ニアフタラバコソ　意ノカヒガアルトハ鳴ウコナレ　素ノナイノニ

意ノカヒヨト鳴ウハズハナイニ

此歌下句にてにをはのよ。たるぞと

切て。志のことにしたべし。又詞の玉の緒二の巻の終にいつるも。一つのしやうし。

みつね

埋乃雨のひとへにうちに夜に花なまじばよりと我ぞ掛にやをこのらぬ

○一 今ラコソ一向ニウスイ心ナレ 三 馴(ナレ)タラバユクヘハ厚ウ疵(オレ)ニ思ヒヨツテ来(キ)
サウナ物デハナイカ 馴タラ大カタヨツテ来サウナモノニ思ハルヽ 打ツメよろし餘
材とろし。但しよろしなむといへるハ。衣の紕(ヨル)ことにていつるハ。とがりぞ。
しゐぐみ事
かくまぬ乃志てよりおふる稼ぬなはの稼ぬ名をたくじくるないとひそ
○一(イツ)シヨニ寐(子)サヘせズバ メツタニ名ハタチハスマイホドニ 隠(一二)分 忍シデオレガ来(ク)
ルバカリヲバ ソノヤウニイヤガラシヤルナイ
よそ人ちらぞ
志(信)と思ふバ思ハぞとやハいひそてぬ思ぞよの中ハ玉しゐきれなる
○トテモ垂テクレヌクラ井ナラ イツソイヤヂヤト云(ヒ)切テシヘバヨイニ ナゼニイヤ

トモオヽ氏云(ヒ)キラズニ ヒツカヽツテ居ルヿゾ(五) アヽ世ノ中ト云モノハ
打ツメ志と思ふバの説ニ。此ハかけたるといふことは。玉ぞきたきなると
のゝいつるが俳諧し。下ふいでやんハ大ぬきふしてといつると。はじとぞひゝ。
思ふてふ人乃こゝ所のくゐごとに立かくまつて見るよしもが邪
○オレヲ思フくトイツデモ云人ノ心ノ内ヘ 玉ゑゴトニハイツテ隠シテ居テ 実(ジツ)ニ思フ
ニチガヒナイカ ウソデハナイカ ジツシヤウノ所ヲ見トドケタイモノヂヤ
おもへども思ハぞとのゝいふなきバ心なやしりぞありふかひなし
○コレホドニワシハ思ウケレヂ ソレヲ玉人ハトカク思ハヌくトバッカリ云ナレバ イヤく
コレカラモウ思ウマイゾ 思フテモソノカヒガナイ
ゑをのゝ思ふといたぐなるべきをいでやこゝろまたぬきふしして

○思ウ〳〵ト云ノモ　ワレバカリヲ思ウノナレヤ　ソレデヨイガ（あるべきを）　イヤモウ（いでや）　面白ウナ

イ

もち人ノ心ハ大麻（おほ）デサ　引（ひ）チガ多ケレバドウモ

新古今　思ふ人をおもはぬもくいまやとぐ思ふ人の名をおもはぬ

○ワレヲ思フテクレル人ヲ　コチカラワレガ思フテヤラヌ　ムクイカレテ　ワレガ思フ人

ガ　ワレヲスッキリ思フテクレヌ

一女

思ひ〳〵人をそ〳〵そもふ思はま〳〵はま〳〵やぬゥや

○一ニカタ誰（けん）ゾオレヲ思フタ人ガアッタデアラウ

ヨカッタニ　コチカラハ思ハナンダデ　ソノムクイガキテ　今オレガ思フ人ガ　オレヲ思フテクレヌ

アヽアラソレヌコヤノ（まゝ〳〵や）　ムクイトハ云コトハナイコカイ　キット有（ア）ルコチヤワイノ

一女

出てゆく人をそ〳〵そもふ思はま〳〵はま〳〵やぬゥや

○出テイナウトスル人ヲ　ドウモ（とゞ）ウレシタダガナイニ　ドウゾ今ノ（キンジョトナリ）近所隣デタレナリト

クサメヲスレバヨイニ　エヽカウ云トキニハクサメヲスル人モナイコカナ

くもなおふそ〳〵くも鳥もなくこぶ人をたのふふうつるてふかり

○ソレ人ヲアイテクレバ　ドノヤウニ涙カツ

ダシデモカハルヂヤ　和（アク）灰汁かうつるをもて泪をとゝそゝぐ

〳〵〳〵ヒゲガ（ノガヒ）有ノ苦ノ詞ヲ修行ヲシテ　テウド苦ノコロ駒ヲ野飼ガテラ

○人ニキラハレ　ワレガ身ハ春ノ駒カレテ　テウド苦ノコロ駒ヲ野飼ガテラ

ニハナレテヤツテカヽハズニオクヤウニ　ワレヲ見ステヽ子カラカヽハヌ

○巻第六

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡』　請求記号 特1-844　　ガラス使用

うぐひすのこぞのやどりのふるすとや家をハ人のつきのかるらむ

○ワシニ人ノツレナイノハ 一二 フルイ物ニシテシマウテノ〻カシラヌ

上ニ句ハ〻ご詞のつゞきのこゝし。打ぬ。ぬるとてのごとくとつるハ。ころし。

さかしらふ友も人まほさくの紫のさやぐ衣をとがむとりぬる

○オレモ夏ノ間ハ イシコサウニ 暑イニヨツテ独寝ヲスルト 人ナミニ云テ マギラカシテオケ圧 冬ニナツテ 此ヤウニ寒イ夜独寐ルノハ 何トモ云ヒヤウガナイ

平中奥

逢ふ事の今ハをつかぬりぬもしば衣ふりくらでハつきのかりかると

○逢フ事モモウ今デハ ハツ〳〵ナコトニナツテ 衣ガフケテカラデナケレバ 其サリヤクガデケヌヌワイ 三の句ぬもバといふてふをいく。其日ふなりぬもだ。

月のおそきよりの詞のきてそのかゝるよりわり。家のことにそかゝらば。

たのおそいようちぎゝ

もゝくしのよりのしかるとも おくもむと思ふ家なりかくか

○吉野山ハ雑部 深山ヂヤケレ圧 日本ノ吉野山ハオロカナ〻 タトヒソナタガ唐天竺ノ吉野山ノオクヘコモツタト云テモ 我ハ其ノ分ニシテ 跡ニ残ツテ居ヤウトハ思ハヌ ドコマデモアトヲシタウテオツカケテユカウトサ思ウ

なゝき

きゝも続ぬあさまの山乃なきましや人のんゆ見てこそやまめ

○何ンゾ氣ニイラヌ〻ガアツテ ワシニ逢フヲ止ウト思フナラ コチノ心ヲトツクリト見定メテ其上デコソヤメルナラ止メタガヨイ 上 其ノカヽツテアル山ノヤウナ

○芸境六

○四十九

モノデ　コチノ心ハドウヂヤヤラ知レハスマイニ　カルヾシウ是ヲ止メタノハマア
三
アマリケシカラヌ　キモノツブレタヿヤノ　人ハ家ニ行ケバ此ニ家ニ居ル
家ハ得ル。銀材。絃勾のてりどを得る説ハ是ニ。お笑。行きほしの説ニ。
伊勢
難波なる事ばかりもしたる事り今ハ家ニ居ルなかくことへむ
○今ノマデハ何シデモ　フルウナツテシマウタ物ヲバ　難波ノ長柄ノ橋ニタトヘタヂヤガ
ソノ長柄ノ橋モ　今度新シウ出来タヂヤ　スレヤ　ムヤウニ人ニアカレテ　舊イ
物ニナツテシマウタワシガ身ヲバ　モウ今デハ何ニタトエウゾ　ナンニモ譬ル物モナイ
よみ人しらず
まゝ事ばかりどなるにぞハよきくかるかやはみぐまてはまどあしきくもなし

○オレハ隠ル実躰ニ堅ウ身ヲ持ツケレドモ　何シノエイるガアルゾ　ソレデモナン
ニモエイヿハナイ　世るノ人ハ苅タ萱ノ乱レタヤウニ乱レテハウラツナ者モアレド
ソレデモサノミワルイヿモナイ　スレヤ実躰ニタシナムブニガソンヂヤ
おきのぜ
何かその名はしかしこのをしかしまとふハられむとりのハ
○ナンノソノ名ノタツヿガヲシカラウ　意ヲスレバ名ガタツトシリナガラ迷フノハ
オレヒトリカ　オレバカリヂヤナイ　皆サウヂヤ
いとこ事りをるをとこふよそへて人の以ひ是バ
此詞出はしハ。くそがいとこ事る男は。くそをとひて。をさしまるよし
を或人の志りくはるはまつと。くそふいひ是バし。よそへてハ。

さるこゝろぬことゝ。さしと。云(イヒ)依(ヨ)するし。万葉ばかりに例多し。考へて知
べし。餘材。此詞出のことを誤まるから。あをもとれ誤まり。

くさ

よろこなかりこ。家身に以ゆるゝ時よるといへ(ふ)ばしぐいつもりにさくばかりし

○ソンナコトハワレヤ 菱ニモシラヌ スレヤソノヤウニ ワレガイトコガ ワレニ 恋ヲスルヤウ
ニ ヨソナガラ云ノハ ソレヤホンノコトデハナイヂヤ 四 タヾウソニ ソノヤウニ 五 云バカリヂヤ
ソレガモシホンノコトナレヤ ワレガ方ヘ 何ニトゾ云ヒカケサウナ 物ヂヤワサテ
三の句いへばいふハなるべし。そハもと云ハと出るゝ。心は誤りて。いへば
とハ写し時をるなるべし。餘材ニ依し。さくハ。さらばこゝ。
色(スグ)しハ何らば。 糸よる針に着(スグ)るをもて。何とをるなし。

題しらば

さぬき

稱ぎ出るとさのゝ 笑ひむやしろそそてハ歎き時 處と時るゝ名
○ソノヤウニ(さのゝ)メツタニ人ノ云コヲ笑入テ タレニモカレニモ逢フ人ガサ(やしろ) シマイニハ(そてハ) ナゲキガシ
ゲウナルデアラウワイ 稱ぎてゝやしろ杜をもて出てしかり
稲掛ノ大平がいそく。下句ハ歎き時きゝ。本ハとりて。その本時出げくて。
杜と時るなるんとよ。そるし。歎きのと。切てんはべし。然るを後の世し。
なげきの處といふ名所とをるハ。此事ばんはしるがへるとり出たる
むがてし。さる處乃名ゆるにあらばと以爲り。此説よ後し。

大輔

歎きこゝる山とし。るくれるぬまばはしらづ。忘のゝぞまづくかまゝ以る

○イロ〳〵ノ歎キガ山ヤウニツモツタレバヤヽ氏スレバヒタモノ二ツ脾杖ヲツイテツムリヲ頓

ケルヤウニサナルヲイ　あとこゝろあて・ふるく〳〵・そゝかづ〳〵杖をつくとそ・そゝそゝろ。

なぎ死をばかもとつゝてゐし・ふきみ人もつゝ更

○哀ユヒニケヤウニ歎キバツカリガツモツテ　レバウソカヒモナイコトニナルデアラウヤウニ思ハレ

人こゝろふるこゝ地　主そのヲニナウタヤウニビツチナイ・哀ヲシテ　ソレテイツアハレルト云ハ第一モナイハ　サヽノ

○主そのヲニナウタヤウニビツチナイ・哀ヲシテ　ソレテイツアハレルト云ハ第一モナイハ　サヽノ

モ雛爺ナコデコソアレ　拠(ヨリ)ドコソノヲヲフミヲトヽソヽロ。

よゐのうふ出て入やるみ月もろ〳〵ものゝふもうるふ

○上　コノゴロハ二アサテモ〳〵ワリナイ物思ヒヲスルコトカナ

そへふとてゝゝれバかく〳〵とかく〳〵されバあるかひもなくびわるさぎるさふ

○ドウレタガヨカラウカカワレタガヨカラウカトレウテシノ定メニクイコトヲ　イロ〳〵思案シ

テヽテ　ヨイヒウテンヲ一ツ思ヒツイテ　一サウヂヤト定メテ　二ヽヲヨリニスレバ又一方(カタ)ニサン

○ツカエガアリ　三又思案ヲカヘテシテゐんレバ　又一方ニサレツカヘルコトガアリ　トカク世中

ノヽすハ　四アヽドウモナラヌモノヂヤ　五一方ガヨケレバ一方ガワルウテ　三のゐもち下

ふゝありとふことをヽゝてんたべし・止ふゝ〳〵せて・け句をうぶるあし。

題材ヽゝ・但〳〵そへふのほふおゝをヽゝ・ヽヽさし。

芸ゐ中ゝうれうびゝふをバふりそゝ儀〳〵なりおゝ

○世中ノウイ・ヌゴトニコレデイ〳〵トゐウテ　人が身ヲナゲタナラ　死(敵)ガオビタヽシウツモツ

テ　深イ谷ガサ儀ウナンデアラウワイ　ケヤウニウイコトノタイヨノ中ナレバ

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡』　請求記号 特1-844

ガラス使用

[illegible]

よれ中ハいかゝるしと思ふ事もしられ人ゝうしみ[illegible]

○人ゴトニ世ノ中ハウイ物ヂヤ〳〵ト云テ恨ミル　サウ数万人ノ人ニウラミラルヿ

ナレバ　世中原ハサゾヤ（いかゝ）メイワクニ思ウデアラウ

よ[illegible]人しらば

何をして身れいたづらに老ぬらむ年れおもはむことぞやさしれ

○オレハマア何ヲシテ此ヤウニ年ヨツタヿヤラ　何ニ（いたづらに）モセズニ年バツカリヨツテ

身ニツモツタ齢（トシ）ノ思フトコロガサハヅカシイ

れきうど

身をさてつんをぶかにもちゝはじ法ひにハいかゞなるとしるべく

○トテモ立身ナドモエセ子バ　此身ハモウ無イ物ニシテ居ルヂヤガ　セメテハ心バカリ

ナリモ大切ニ持テ　ステコシジヤウニハナルマイゾ　ソシテシヾウハ（つひよハ）ドノヤウニナルゾト云

トヾケルヤウニサ（べく）

ちはかし

しらず雪れとも[illegible]身ハぬりぬもどくれきえぬ　抱かぞ有を為

○[illegible]身ハ此ヤウニ年ヨツテドコモカモ大ニチガウタケレモ　心ハクヅヲレヌモノデサ　ヤウ

ハリ若イ時ニカハラヌワイ　雪にふるきしぬといふ河のしらそし

[illegible]　よみ人しらず

うゑれ[illegible]咲て乃後のみなもバやさ[illegible]抱とのゝ人のいふ事

○梅ノ花ノ咲テチツテシマウタ跡ヘナル実ハ酸（ス）イ物ヂヤガ　オレハソノ梅ノ実ヂ

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡』　請求記号 特1-844　ガラス使用

ヤヤラシテ　人ガメレデモ（のミ）オレヲバスキモノヂヤくト云　殺（ス）きと好色（スキ）とを　ゑていつり

法皇ふしがハふおもし（法出アソバシタ）海しとゝもゆる日さる山乃かひふ

さきぶといふことは此ハてよ（供奉ノ所ニ）あを結ぶる

みつほ

もじしらふましらぬきゝ所しむきは山のかひあるはふやハ所しぬ

○猿ヨ　ソノヤウニ雖茂サウニアヽリナクナイ　今日ハ此通リニ和クモ法皇様ノ御幸ガアツテ　此山ノカウシテアルカヒガアルデハナイカ　アリガタイ日ヂヤゾヨ今日ハ

此しらぞ　よそ人しらぞ

世代ハとひこの本ごとに立よりてうつふしぞ見はあさはきぬなり

○此衣ハ　世ヲイトウチ一所不住ノ僧ノ　イツデモ（毎ふ）ドコナリトユキガヽリニ　木ノカゲヘ

立ヨツテハ　帯ナドモトカズ　ツイソノヽヽデ寐（子）ル　五倍子（フシ）染ノ麻ノ衣デゴザル

うつぶしとハ神代紀ニ全剥（ウツハギ）とある全（ウツ）と同じくて、そのまゝにて臥（フス）

をいふ。まろ祢といふに同じ。うつむきに臥（フス）ハ所しぬ。又寄事に五（フ）

倍子（シ）うつろなる地なるなに。うつふしといふとあるもいとこゝろし。

全臥（ウツフシ）を五倍子（フシ）にいひかけしるにてこそ。俳諧ハ其ハ是也。

古今和歌集巻第二十遠鏡

大歌所御歌

おほなほひのうた

ゆくらしき年のたゞ見ふかくしてそ年をかぞへ見

○行末千年一デモ　毎年トシノ始メニハ　此三　毎リニサ　タノシイ事ヲ存分ニシツ

クサウワイ　をへ見ハ終めふて極ヲ　ハ極むるし。法見の時ハ年まで

もといたひてかくのごとくのしきつゝあるを法むといつるし。

日本紀ニハ法久まつら見前代までふ

ぬるきやまもまひろうと

志もとゆふかづらき山ハ　ある雪のまれく時なくおもれゆる哉

○一　葛城山ハ　冬ハ雪ノフラヌ日ト云ハナイガ　ソノ葛城山ノ雪ノトホリデ　ワシハ

イツト云フモナシニ　ジヤウヂウ　君ノフガ思ハレテ　サテモ忘レル　ヒマノナイフカナ

あふこぬり

ゆふこゝろもあきらちくるをばう孫のゆふしらげぞ鳴なる時ぬこの春ハ

○近江カラ今朝　夜ノ内ニタツテクレバ　ウ子ノ野ニアレ鶴ガサナクワ　サア夜ハモウアケルゾ

みげぐきぶるを

みげぐきの昔の屋がゝ　ふ妹とゆまとく孫での朝けの霜のふりハも

○山城ノ國ノ此岡屋縣デ　妹トオレト寐テ夜ノアケタ今朝ノアノ霜ノフリヤウ

ワイノマア　アノ君ヲ見レバ　昨夜ハキツウ　ヒエタサウナ　コチハ二人子タデ　ソレホド

ヒエル夜ヂヤトモ思ハナンダニマア　あぐきハ　ナラべて昔の松洞し別ふ考へ見り。

又たゝふ家を屋形といつることさらふなし。　折笑ひろし。もし彼説のご

とくハ心の句孫てし朝け形どうしでハ今朝ハ無ことし。　○子秋云。うげぐきの考へ。

おがつまふくたしく見る。

志たりし山ぬり

○五十五

○五十六

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡』　請求記号 特1-844　ガラス使用

志ちろ山こちら出てゑきバかさゆひの鳴こぎゐくるしまなくしをぶね

○シハツ山カラズツト出テ見レバ コイデ鳴ル小船ガアレ 笠ユヒノ嶋ノアタリヲユクワ

神おそびのうた

とりとものうた

神がれ乃みむろ此山のさかき葉ハ神のこまへに志ぶりとしらむ

葉ハとびおほどかきをぬさかれだ此立ちかへべき神乃き孫かと

きほハ本根にて志れがち梯をいつる也本を本根といふ也万葉にし

葉ハ葉根とよめる事多く又岩を岩根 石を石根 弓を弓根などいふ例にて根ハ深くる事也さきハ神のき孫ハ神此本也 此ハ此相生葉

葉ハ事ハおしけの山乃梯葉ときハなる陰に葉ゆる神のきほ此と

よ思るハ既にて此事を巫覡のことゝ心得誤りてよめりとぞおぼゆる

まれりし此あるし此山乃山人と人も見るがに（見ルヤウニソノタメニ）やうかづらせよ

打ゆふ見るがにを見てしがなにとゆるハ見るし がにの 他の例にとがり

み山にハ何らきぬるらし（フルサウナ）とやまれるまされのかづら色づきにけるを

こちのくれあぐちの志ろ見がむかバ末さへ（末ヽニデヨツテコイ）よりて志のびくに

見がくどの板井此しみげ里（サトガトホサニ）とおもへ人しくるほバみ葉おひにきり

しるめ此うた

きれくろひのくま川にし弱と見て志びしあかへりぞ（カゲナリトモ見ヤウニ）ぬしぞに見せ

かへしものゝ事

葉梯をかしいふによりて葉此ぬしにてふりさハ梅乃花がさ

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡』 請求記号 特1-844　ガラス使用

志人を始めくまびの中山おびにまるかぞ谷川乃音ぬきやりさ

此歌ハ義和の御(オホン)べのきびの国ぬ歌。千秋云おほんべハ大嘗(オホニヘ)の御を音便りんといひ。べを渇ろハ上をんといへだし。

みまさかや久米ぬきらく山さらくふ日が名をしてぞ萬代までふ

こまハ和ぬきの御べ乃萬代ノ国のうた

みのゝ国美ぬふぢ川にかえだして君につかへむよろづよまでに

志ハ元葉の御屋ぬみのゝうた

君が世をかぎりもつらじ長ぬ御まさごぬ数ハよそ御ちとも

こまハ仁和乃御べのいせの国ぬうた

大ともぬ人ぬ歌ぬし

近江のやかごえぬ山城にそて猶バかまてぞ見ぬる君がちとせを

志ハは今上ぬ御べのうたふ乃うた

東歌

みちのくうた

あふくろふ雪にかち和ぬりつきぬとも君をバやらじ御てバ其べなし

○アノアフクヽ川へ雪がズウツト立テ夜がアケタリモ　君ヲバヤルマイゾ　イナセテ又見エル

ニデ待ツアヒダガドウモナラヌ　神二句ハしくゞ乗の明る事しきのミ明り。

折吹詞ふかねハぞ。もしかの御のことなるバ。ものりハ。ものれといはでハ

吹しぞ。餘材にし。つふくぬを人は色ふよせてといつるも。ものし。

みちのくハ叫びくハあまど塩がぬぬうらこぐ船乃御なでかなしも

○奥州ニハドコニモカシコニモ面白イ取ハオホクアレドモ　中デモ此塩竈ノ

浦ヲ アレ綱手デ船ヲ引テユクアノケシキガ ドウモイヘタ物デハナイ オモ
シロイコトヂヤワマア
ヨガせこ浅みやこそしやアそて塩が多れまが花の嶋乃まりぞ忘しき
○コチノ人ヲ京ヘヤツテ 留守ヂウ イツモドラルヽヿヤラト 三四 待テ居レバ
サテモ忘シイ
をくろざれみり乃こしほの人なるが都の法をふいざといたまし我
○アノ黒崎ノミツノ小嶋ガ人ナラ 京ヘノミヤゲニ イザ来イト云テ ツレテイナウ
モノヲ をくろざれのをハをもつせ船のを無し。思湊といふ地名し。
みさふらひたりさとまうせ京城望れ木乃下家ハ取りまされ
○法侍庭 ソレ法笠ト中上サツシヤレ 此京城望ノ木カラオチル家ハ ケシ

カラヌモノデ 雨ヨリモキツウヌレマスゾヱ
もがミ川のぞもバくぐるいなぬるのいなふきつらぬ志の月ぞかり
○上 イヤデハナイガ 此月中ハドウモナラヌ
のぞもバくぐるハのぞるもつるもバくぐるもつる我いふ。
君をおきてつぐし心をヨがりしバ末れまり山信もこえなむ
○ドウ云ヿガアツタト云テモ オマヘヲオイテ ワシハ外ヘ心ヲウツスヿデハナイ モシソン
ナ心ヲワシガ持ッタラ アノ末ノ松山ノウヘヲ浪ガコエルデアラウ ソンナヿヲハナイヿ
ヂヤハサテ 末の松山といつるハ。さ思といふ所乃。松山なるべし。
さがミこと
小よろぎの破しまち船らしいそ船つむ先ぎしぬらさ船沖にをも信

○意境六 ○五十八

○小ヨロギノ根ヘ出テ居テ 根菜ヲツムアノ子供ガ アレ〳〵浪ニヌレル 浪ヨコレヤ
ソノヤウニアノ子供ヲヌラスナ 沖ノ方ヘ折レヨ 又ハ 立テコズニ沖ノ方ニ居レ

折
をゝハ・をれよ・をゝもゝきべし・又浪のようちあるごとくいへだ・波也 来も有べし・

ゑとちうゝ

佐〳〵そ孫乃こかのゝみ陰をゝ見どころ 見がみうぎふまん 陰をゝ

○筑波山ノアチラウラニモコチラウラニモ 木ノカゲハ オビメシレウ・シゲウアレドモ 君ノ

陰蔭ニ・サツメカゲハナイ

つ〳〵は孫の雀ゝもみぢ葉おちつもりもるもちゝなり 見べてしかなり〳〵と

○什ツクハ山ノ紅葉ノチッテツモツタヲ見レバ 惜ウ大切ニ思ハレヨガ テウド什ノ紅ヲ

思ウトホリニ 什常陸ノ国ノ内ノ百姓ハ ドレカレト云ヘガテナレニコトぐく フビンニ

大切ニ思ハルヨウニアノ子供ガ アレ〳〵浪ニヌレル 浪ヨコレヤ
ソノヤウニアノ子供ヲヌラスナ 沖ノ方ヘ折レヨ 又ハ 立テコズニ沖ノ方ニ居レ

折
をゝハ・をれよ・をゝもゝきべし・又浪のようちあるごとくいへだ・波也 来も有べし・

ゑとちうゝ

佐〳〵そ孫乃こかのゝみ陰をゝ見どころ 見がみうぎふまん 陰をゝ

○筑波山ノアチラウラニモコチラウラニモ 木ノカゲハ オビメシレウ・シゲウアレドモ 君ノ

陰蔭ニ・サツメカゲハナイ

つ〳〵は孫の雀ゝもみぢ葉おちつもりもるもちゝなり 見べてしかなり〳〵と

○什ツクハ山ノ紅葉ノチッテツモツタヲ見レバ 惜ウ大切ニ思ハレヨガ テウド什ノ紅ヲ

思ウトホリニ 什常陸ノ国ノ内ノ百姓ハ ドレカレト云ヘガテナレニコトぐく フビンニ

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡』　請求記号 特1-844
ガラス使用

かひうて

うひがほをさやかもみしがきしもおくよてかりぬるさやの中山

○甲斐が嶺(子)ヲハツキリトみタイモノヂヤ　アノサヤノ中山ガ　ヨコタワツテアルデツカヘテ　ハツキリトみエヌ　アヽ心ナイサヤノ中山ヂヤ

○本紙云四の句のふせるを。殿注に一本にくせる。又一本にこせるとも云るよし也。東方にて。心をもきしもといへもバ。その同じ事の事詞なるべきもバ。右の二つ乃内ぞ正しかるべき。但し古言に。姉ををこやるといへもバ。くせるこせるともふ。せりじハ。やを写し誤もるりハあらざるか。

甲斐が根を称てしこし吹風を人にもがもやあてつてやらむ

○峯ヲコシ山ヲコシテ甲斐が根ヲ吹テコエル風ヲ　四ドウゾ人ニシタイ物ヂヤナアヤ　ソシタラ京ヘコトツケヲシテヤラウニ　此方も京より下里居る。其の目などのよめる所なるべし。殿注に志てがふ屋し。上なるみちのくあれし。

みやこの法とかゝるとゝ云るも。京人のとこそ申しかれ。餌材の説を。かひがほをといつる。をもじにかなハぬ。又をこれも。上なるあふよりて以つる所もど。此方ハよし所し。

いせうて

をふの浦にかゝるえ出しおもひなるなし乃なるとも所にてかゝるをむ

○上　ナルナ・ラザルハトモカクモ　一アナニデアラウト　イツシヨニ寐(子)テハナシヲセウ

なるとハ。父母所どもゆるして。殿ハ是て夫婦と所なるすれ。成就するをいふ。

各れ所をもれまつりのうて

藤原敏行朝臣

ちハやぶる(渇)かものやし所の姫小松よろづよ姉をも亀ハかゝらじし

家々ニ称スル読本ト云ヒ本ニ乃ラ書キ入レ以ニ墨ヲ滅ケシ焉今別ニ書クヽヲ

書第十　物名部

しぐらし　法しゆれ

そ母人ハ高木ひくらしなりしひきれ山乃やうぶこよびうよむなり

○仙人が材木ヲヒクサウナ　アレコタマガキツウヒヾイテ　大ゼイノ人ゴヱガスルワ

左リ新ニ下空塚ノ上ニ

かつらおん

かゝまつとても何をかゝる方はきてもうんむかうハほのかゝりかし柚を

○死ンダ人ノ魂ガ　ソラヲ飛ンデ又カヘツテ来テモ　何ヲ見ヤウゾ　何モアル物ハ

ナイ　ジブンノ死骸ハヤイテシマウテ灰ニナツタモノ

をかしる方は本　友則ノ下

くものおも　法しゆき

むしのしこひつくをもバタぐものおもかぎふのゝアしゝろ加那

○ユフカタニナレバ　アヽ今ゴロハ思ウ人ノ来タジブンヂヤガト　忘シウ思フテ居レバ

其人ガヒタスラ面親ニ見エテ　サテモ今コヽヲアルクヤウニアエルヿカナ

忍ま利ふ下

おきのゐ　みやこじゐ　をのしこまち

おきれゐて身ハやくよりもかなしきハみやこ志まべのゐまなりけるを

○カラダヘ熾火ヲ居テ家身ヲヤクヨリモカナシイハ　京ト嶋ベトノ別レヂ

ヤワイ　下句ハ思ふ人乃、京ちり、鳴べといふべきを見ゆ
く、別をいつるなるべし。
かゝてく清朝ノ下
そもどの　あをる　　ひやもち
うれめをバよそめとのミぞのがをゆく雲のひをゝろ山乃ぬもとに
○嘉ラハ今　世ノ中ノウイるヲバトシトノガレテヨソニ見テ　雲ノフカイ山ノフモトヘ
引戯テユキマス　ひをゝろ川ハ深くゝろし、万葉二ふ、ふる雪ハあを
ふなふりそと云るも、深く始ふりそし、此ヲ説ヲ、此ヲ始ヲ、折
笑ひごとし、但し深殿と栗田とハ、何の縁もなき地名なるを、先
らはて説りしるハ、かゝ清和天皇の御ヲ有しによりて、その

ころよ名る始るべし、さるをバ左の注も、まことにて見るをバ、難なし、
かのみかぞ始御ヲ、ふよりざれバ、深殿と栗田とつゝ称ることは、
此ヲハ、ものをのみかどのそめどのよりを、ひをゝへ、
ひとゝ見うきる時ふよ名る　桂ノ高ノ下

巻第十一

奥山乃夏の招志のぎぬる雪の下
ひふ人をこゝふるゝ所ハ大井川ながるしるゝふおとゝぎり
○今日オレガ人ヲ忘シウ思フ心ハ大井川ノ流レル水ニモオトラヌクラ井ヂヤワイ
ほ見ゆ
ゝだもとふあふ坂山乃志のもとゝきほふハ出ぢもこひとゝる
○上　ワレハ色ニモ詞ニモ出サズニ心デバツカリ一ア忘シウ思フテクラス　サテモシンキナ

コトカナ

春第十三

恋しくハ思ふを思へ業の下

いぬかに就ても乃山なるいぬや川いぬとこそへよ己が名もちをな

○モシ人が問ヲ夕ナラ 上 ソシナコハドウヂヤカシラヌト云ヂヤゾ 必ス我名ヲモラス

デハナイゾ 奇笑ふ万葉の此歌ハとかれたるやういふくしたがつり。

訓もあがつり。万葉ふ云るハいさとを寸許(キコ)瀬(セ)余名(ワガナ)告奈(ノラスナ)なりて。

おもふるとはじきこせきのくるへといふふ同じ。

此うたゞる人あ見れみがどのつふ見れうしへふ給つると

かへし

うゑへのしそまつ也

山しれ乃青ねのゝみにの青にどふ人乃たるべくこがたひ見やも

春第十四

おもふてふこゝのそのゝや私をへて下

そとお里をめれひとりぬてみかぎ見こひしてまつりて

こがせこがくべきよひなりさくがふれくものふるまひかゝりてたるしも

○コヨヒハ必ス出ガアラウト思ハル夜ヂヤ アレアノ蛛(クモ)ノスルコデ サウヂヤト云コガ

サキヘヨウシレルワマア(うまて) 蛛をさくがふといふ。蟹(カニ)ふ似て小(チヒサ)きよしし。

涼春父恋しとハしがれづけハむことなるむ下

書うく

そこたらバ法こふもゆう望こちみのえれ岩ふおふてふ恋こされ為

○道ヲシツテ居ルナラ　住ノ江ノ岸ニハエテアルトイフ　忘ヲワスレル忘草ヲツミニデ
モユカウ　書くゝ、萬葉ハ千載おぼしだして、かくよみるまゝ
きふからば、又おぼえだしても、此集にも入まじ、此ふあらば、又書
くれよくちふからだと、以ふも、うきら猶だ、べてくたゞハ、
さまで海さしくハ、ヨかるく物なりしからざるをや。

遠鏡六の巻ハ是

特1
844

尾張書肆東壁堂製本目録

名古屋玉屋町　永樂屋東四郎

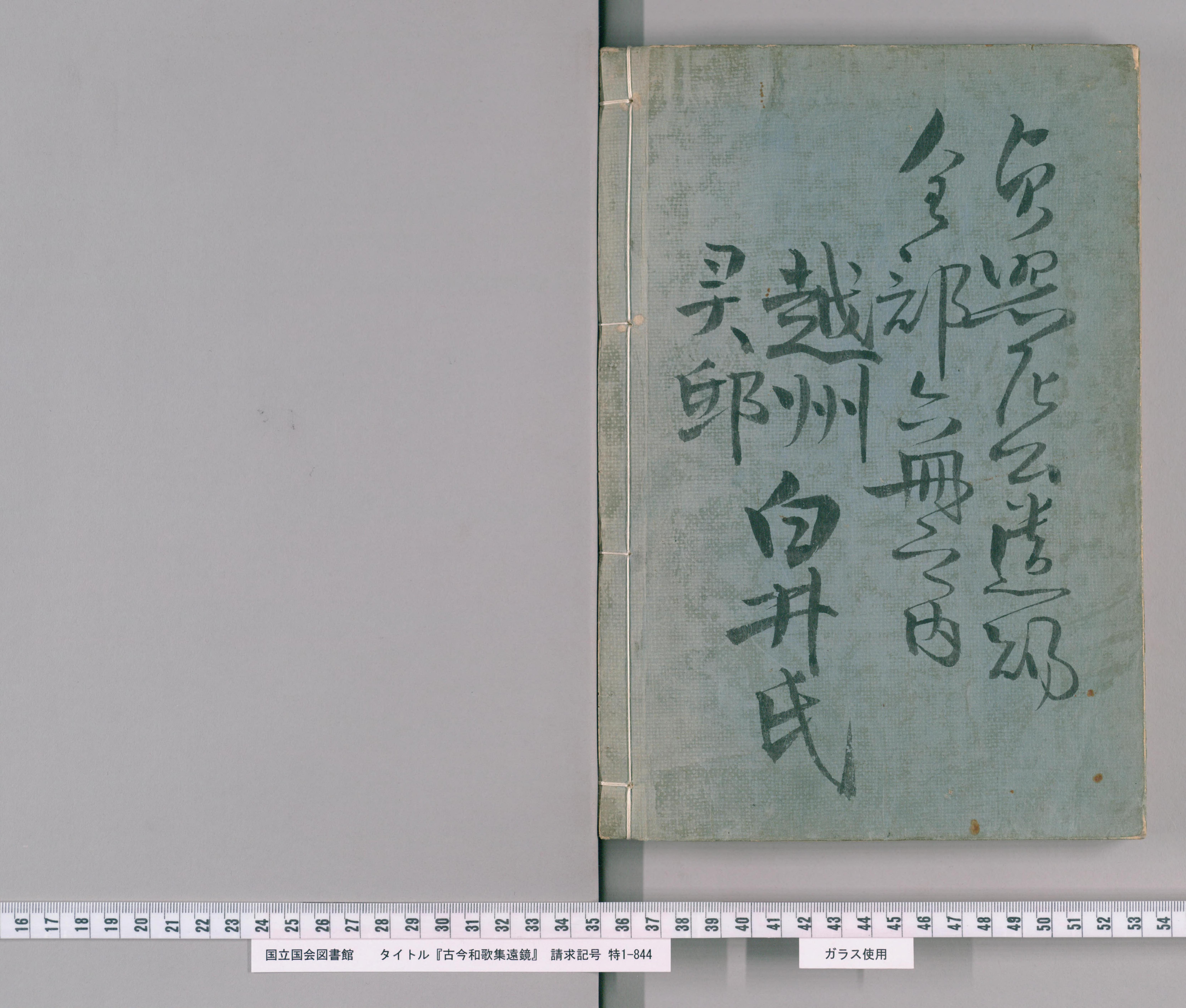
神代正語	本居大人著	全三冊
古事記傳初帙	従一至五 同上	全五冊
同二帙	従六至十一 全六冊	
同三帙	従十二至十七 三大考添共七冊	
同四帙	従十八至廿三 全六冊	
同五帙	従廿四至廿九 全六冊	
同六帙	従卅至卅四 全五冊	
同七帙	従卅五至四十 全六冊	
同八帙	従四十一至四十四 全四冊	合四十五冊
同 目録	同右	全三冊
神壽後釋	同右	全二冊
玉くしゐ	同	全一冊
古今集遠鏡	同上	全六冊
源氏手枕	同上	全一冊
同玉小櫛	同上	全九冊
天祖都城辨〻	同上	全一冊
御僊行長歌	同上	全一冊
玉勝間初篇	同上	全三冊
同 二篇	同上	全三冊

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡』　請求記号 特1-844
ガラス使用

萬葉集畧解 千蔭大人著 全三十冊
年々随筆 石原先生著 初帙三冊
江戸職人歌合 同右 全二冊
臣連二造考 同右 近刻
冠位通考 同右 嗣出
宰相通考 同右 近刻
尾張の家法と 同右 近刻
志ミ付ヒ[illegible]物語 六樹園大人著 全二冊
和名抄 大須本 全一冊
俳諧歳時記 著作堂先生著 全二冊

玉勝間四篇 本居大人著 全三冊
同 五篇 同右 全三冊
義濃の家法[illegible] 同右 全五冊
同 折添 同右 全三冊
地名字音轉用例 同右 全一冊
歴朝詔詞解 同右 全五冊
葛花 同右 全二冊
参考熱田大神縁起 全一冊
萬我[illegible] 市川先生著 全一冊
遷宮物語 菊谷先生著 全三冊

国立国会図書館 タイトル『古今和歌集遠鏡』 請求記号 特1-844
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡』 請求記号 特1-844
ガラス使用